

鹿児島国際大学社会福祉学会誌

ゆうかり



第18号

鹿児島国際大学社会福祉学会編集

あたらしい表紙での再スタート —「ポポラス」登場—

鹿児島国際大学の「シンボル樹」は、校歌にも謳われている「ゆうかり樹」です。ところが、このところ「ゆうかり」は学内では少し旗色が悪くなりつつあります。かつて学生駐車場一帯に聳えていたゆうかりは、すべて切り取られ、桜の木がずらりと植樹されました。また、図書館横の「森のガヤカフェ」の先にあったゆうかりの幼木（平川動物園のコアラ飼育用に植えられたもの）もすっかり刈り取られてしまいました。昨年、鹿児島国際大学のマスコットとなった「コクサイ君」のオーバーオールの前ポケットにはサクラのマークが燦然と光り輝いています。いまや本学のシンボル樹は「桜」なのかと疑うほどです。

けれどもここに強力な助っ人が登場しました。“ポポラス”です。ポポラスというのは、ゆうかり樹の一品種で、葉っぱが可愛いハートの形をしているのが特徴です。園芸を趣味にしている人達にポポラスは大人気です。園芸店では、ポポラスが入荷するとすぐに売り切れてしまうほどです。そこで、このポポラスを今回の表紙の写真に載せることにしました。併せて、ポポラスをヒントにしてマスコットキャラ「ポポラス」も登場させてみました。このマスコットはコアラもどきの形をしています、そのお腹の袋には、ハート型のポポラスの葉っぱを隠し持っています。

人類愛のシンボルである「ハート」を抱くポポラス樹。そして、マスコット「ポポラス」。われわれ社会福祉学科に集うメンバーも、人類全体の平和と福祉とを、熱いハートで受け止めて、大いなる社会貢献をしたいものです。**「社会福祉学科がもっと元気になりますように！」**。ポポラスは、私たちのそうした願いの象徴でもあります。

このポポラス樹は、まだまだ幼木ですが、毎年少しずつ成長してゆくことでしょう。成長したポポラス樹を、一年ごとに写真におさめ、表紙に飾ってゆきたいと考えています（背景の場所も毎回変えてゆく予定です。今回の撮影場所は、本学のカフェレストラン「ピーチピット」です。「ピーチピット」の皆様の協力に深く感謝する次第です）。

なお、表紙に登場している「ポポラス」の立体マスコットを作ってくれたのは、編集委員の有園菜央さんです。紙粘土をコネコネして見事に作り上げてくれました。感謝、感謝です。「ポポラス」は、まだ『ゆうかり』限定のマスコットですが、いつか皆さんに広く愛されるようになると嬉しいです。



目次

巻頭言

「平成最後の『ゆうかり』は次の時代を生きるための指針となるか」 社会福祉学会会長 松元 泰英	1
---	---

自主研究助成による研究報告	2
---------------	---

社会福祉学会講演会報告

「ちょんまげ支援隊長」ツンさん講演会 —「断続は力なり」— 文責 村上 光朗	15
---	----

社会福祉学科新企画行事「一日大学生体験」

一日大学生体験 岩崎 房子	23
「一日大学生体験」同行レポート 上村 義歩	

「社会調査実習」—ラストランとなる2018年度

社会福祉学科の社会調査実習—過去現在 高橋 信行	26
サヨナラ「社会調査実習」。いずれまた、全学的な復活を！ 村上 光朗	

ゆうかり編集委員会特別企画

「大学猫」の考現学 有園菜央・佐々木晶	29
---------------------	----

社会福祉学科イベント

新入生歓迎行事	35
ソーシャルワーク実習の感想およびコメント	36
精神保健福祉援助実習について 文責 岡田 洋一	40
介護実習 文責 岩崎 房子	42
教育実習 文責 古賀 政文	44
新入生ゼミⅡ「福祉施設見学研修」について	50

演習論文報告会コメント

(高橋信行・村上 光朗)	54
--------------	----

2018年度演習論文テーマ	58
---------------	----

鹿児島国際大学社会福祉学会会則	62
-----------------	----

2017年度鹿児島国際大学社会福祉学会・収支決算報告	64
----------------------------	----

ゆうかり編集室便り

	65
--	----

— 平成最後の『ゆうかり』は次の時代を生きるための指針となるか —

社会福祉学会会長 松元 泰英

平成最後の『ゆうかり』となる第 18 号が完成しました。思えば、昨年度の第 17 号は、編集担当だった私と編集委員の学生とで四苦八苦しながら作成したことを思い出します。昨年度は、「ゆうかり編集委員特別企画」として、編集委員の学生と一緒に車イスで大学構内のバリアについての調査を企画しました。最初は係という使命感だけで、大学を回っていたのですが、実際に調査し始めると、気付かされることも少なくなく、途中からは興味深く取り組むことができたことがいい思い出です。例年、ゆうかりの編集委員は各ゼミから機械的に選抜され決められていますが、今回は学生からの立候補により編集委員が決まったということなので、感心させられました。

ところで、皆さんもご存じのように、平成は間もなく終わり、新しい年号の時代が到来します。平成の 30 年間には、色々な事件や事故がありました。すぐに思い出すのは、平成 7 年からの「オウム真理教事件」でしょうか。この事件は、多くの方がご存知のように、オウム真理教が起こした一連の事件で、弁護士一家殺害事件、地下鉄サリン事件ほか組織的な犯行を繰り返した日本犯罪史上最悪の事件です。まるでドラマのようなテロ事件で現実の話と思えなかったことを記憶しています。

また、平成 23 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災は日本史上最悪の自然災害といえるでしょう。当時、特別支援学校に勤務していた私は、授業が終わり職員室に入っていくと、先生方がテレビに注目していた様子を覚えています。不思議に思って、私もテレビに視線を移したところ、多くの家々が津波によって流されているではありませんか。最初は、現実とは捉えにくく、しばらくはフィクションかなと思いながら眺めていました。また、自然災害ではありませんが、平成 13 年に起こった「アメリカ同時多発テロ事件」で、ハイジャックされた航空機が高層ビルに突入したシーンも、あまりにも鮮烈で、映画での特写シーンだろうと思ったことを思い出します。人間の想像を絶する事件や事故は、現実のものとして受け入れることに時間がかかるのかもしれません。

この様な平成が終わり、やがて新しい年号の時代が到来します。次の時代はどんな時代になるのでしょうか。益々、少子高齢化が進み ICT 等が発達した社会になることは間違いないでしょう。このような社会を生きていくために必要な力はどのようなものなのでしょうか。

私は、おそらくいつの時代でも何事にも主体的に取り組み、挑戦していく力だと感じています。つまり、この『ゆうかり』の編集委員に自ら立候補してくれた学生の主体的な行動は、次の時代を行きぬくためのちょっとした指針になっていると思います。この社会福祉学会誌の『ゆうかり』を手にとるとき、ちょっとでもそのことを頭の片隅に思い浮かべてもらえると幸いです。

2018 年度社会福祉学会・自主研究助成による研究報告

社会福祉学会自主研究助成は、「鹿児島国際大学社会福祉学会・学生会員の自主的な学習・研究活動の活性化を図る」ことを目的に、毎年、自主研究（ゼミを含む）や特色あるボランティア活動・実習活動報告等を行う学生に対して、課題1件あたり5万円を上限として、総額30万円を限度に助成しています。

毎年、社会福祉学科の学部生や福祉社会学研究科の大学院生による活発な研究が行われています。来年も多くの学生が、自主研究助成に取り組まれること期待しています。

今年は、社会福祉学科1年生と福祉社会学研究科の大学院生より5件の研究報告が行われましたので、以下に自主研究助成論文を掲載します。（文：上田雪子）

研究報告 その1

子どものコミュニケーションと遊びについて

報告者 池田 健真・大原 美岬

2018年8月7日に、社会福祉学科1年生11名で、熊本県阿蘇郡西原村にてボランティアと情報収集を行った。私たちは、ボランティアでの企画やレクリエーションについての報告をする。

子供たちとコミュニケーションをとる上で、子供たちとの距離について考えた。午前の部では、ミサंगा、ビーズ、ダイラタンシーやかき氷など、一人ひとりとの距離が近くなる、また子供たちにさりげなく触れることができる企画を考えた。次に、午後の部では少し子供たちとも慣れてきた事を仮定して、宝探しや紙飛行機、ボール遊びなど集団で出来る遊びを通してボランティアスタッフ全員と触れ合えるように計画した。

1. レクリエーション

レクリエーションでは、宝探し・紙飛行機・ボールを使った遊びを行った。宝探しは、年齢や性別に関わらず反応が良く、事前に景品を見せておくことによって「これ何？」と宝探



しへの関心を持ってもらえた。隠す物は、厚紙のカードを使った。しかし、用意していた景品以上に子供たちが集まり、2回目以降子供たちから「景品を貰えない人いるの？」と不満の声がでた。紙飛行機は、幼稚園児から小学生まで14人程度が参加した。最初は、子供の注意をうまく引き付けられず開始の指示が通らなかったが、手軽に作れるところやどう飛ばすのかなど模索しながら楽しむことができた。ボールを使った遊びでは、予定していたドッジボールや野球をすることが出来なかったが、子供たちが持ってきていたボールを使ってサッカーをした。反省点もあるが、遊び方を工夫しながら子供たちと触れあうことができた。

2. 企画

企画ではダイラタンシー・かき氷・折り紙・ミサंगा・ビーズ作りを行った。ダイラタンシーは、片栗粉と水で簡単にできる実験である。準備に時間がかかったり、手拭きやバケツ、ブルーシートの準備が不足していたりした。しかし、子供たちが笑顔になってくれたこと、興味を持ってきて、どうして液体状のものが固くなるのか考えるきっかけとなり、子供たちが皆楽しそうに話す姿が印象的だった。かき氷では、熱中症対策として200食準備をしていき150食以上完食となり、仮設の方々と子供たちが笑顔で「美味しいよ！」と喜んでくれた。残った氷は無駄なく削りきり雪合戦のようにして遊んだ。折り紙では、幼稚園児から小学生まで10人程度が企画に参加した。子供たちは他のボランティアの方々と何回も折り紙をしているのか、手慣れた手つきでこなしていたのが印象的だった。自分たちの折り紙のレパートリーを増やすことが今後の課題だと感じた。ミサंगा・ビーズ作りでは、ビーズが8人、ミサंगाが4人参加した。難易度を3つに分け、20分～1時間で出来るように計画した。ビーズ作りはどの年齢層にも人気だったが、ミサंगा作りは長時間の工作となり、高学年でないと難しかった。ミサंगा・ビーズ作りは男の子たちからの人気がなかったのも、興味を持ってもらえるような工作が必要だと思った。



3. 最後に

初めてのボランティアの計画を自分たちだけで進めることは難しく苦労したが、じゃんけんマンさんやじゃんけんマンファミリーの方々のおかげもあり、無事に成功することができた。子供たちと笑いながら楽しむことができて貴重な体験となった。私たちも初めは何も分

からない状態で受け身になることもあったが、徐々に話し合いを重ねていくうちに皆ともアイデアを出し合い協力して進めていくことができた。

今回のボランティアに関して、ご協力を頂いた鹿児島高等学校の先生方やじゃんけんマンさんファミリー、また、御指導下さった諸先生方には感謝しています。この経験を今後の日々の生活やボランティア、実習等に生かしていきたいと思います。



研究報告 その2

被災地における高齢者等のコミュニケーションと生活ニーズについて

報告者 森 博斗・山元 結花・脇絵 里香

熊本県西原村の小森地区仮設住宅内の集会所の「被災地における高齢者等のコミュニケーションと生活ニーズ」についての報告をする。私たちはC棟・D棟のみんなの家で出会った高齢者の方々から話を聞いた。

インタビュー

まず1人目はAさん。現在C棟に住んで2年経っている。最初の頃と比べて今は暮らしやすいと言っていた。仮設住宅の隣に娯楽施設「西原まんとか」があって楽しめるからである。しかし、今年の8月いっぱい施設が無くなるため、残念そうであった。

問題は2つ。1つ目は、この家に、あと何年住むか分からないこと。2つ目は、仮設住居者どうしの付き合いが少ないことである。



今もどこに誰が住んでいるのか、よく分からない状態である。また、店を増やして、もうちょっと便利になってほしいという声もあった。

2人目のBさんは、震災の後、自分の息子のマンションに1ヶ月半住み、次に仮設に1年半、今は、アパートに住んでいる。仮設に住んでいた頃、最初は住民どうしが助けあって住みやすかったという。しかし、住民が住み慣れてくると「共同」が無くなっていき、近所付き合いが無くなっていった。このことから、最初にあった住民間の繋がりが、徐々に薄まったということがうかがえる。

3人目のCさんは、震災の後、中学校の体育館で数ヶ月暮らした。その後、仮設住宅に移住して2年が経過した。津波がこなかったのが被害が大きくならずにすんだと言われている。

4人目にDさんの話を聞いた。Dさんの話によると西原村の仮設住宅にはA～F棟まであってA棟は体の不自由な方・高齢者の対象であり、B棟・C棟・D棟・E棟・F棟は地区ごとにわけている。また、A棟・B棟など1つの棟ごとに大きな集会所（みんなの家）があるので最初のころと比べてコミュニティはできている。問題は、A棟が復興住宅なので、家賃が必要になることである。A棟は今後も残るが、いずれは、A棟もいっぱいになると思われる。

最後に、D棟集会所（みんなの家）を利用する方々に話を聞いた。室内は、テレビ・冷房といった設備が整っている。15時以降になると人々が集まってくる。家で過ごすより集会所に来て、いろいろな方と話したりテレビを見たりするのが楽しいと言われていた。また、医療費の免除が2017年9月で終わったため、医療費もかかるようになった。もともと医療費の免除は自分の家が全壊もしくは半壊の人が対象とされている。その免除が終わってしまったため、困っているとのことだった。

その他の意見

- ① 2018年8月現在、西原村の仮設住宅には、350世帯ほどが住んでいる。
- ② 仮設住宅には抽選がある。いわば早いもの勝ちである。抽選に当たらなかったら次いつ抽選があるのか分からない状態。
- ③ 仮設住宅の近くに公営住宅（復興住宅）がある。公営住宅は、所得に応じて自分で家賃を払うシステムである。8月を過ぎたら何人かは、新しくできた公営住宅に引っ越す予定である。なお、公営住宅に引っ越せるのは財産が豊富にある人に限られているようだ。



まとめ

このようにコミュニティ作りができる施設が1つあるだけで、人々は、元気になっていくのだと感じた。多くの方がそこを利用することで、近所どうしの付き合いが生まれるのだ。また、今ある娯楽施設「西原まんとく」は、2018年8月いっぱいでの終了のため、集会所（みんなの家）だけでなく、娯楽施設や運動施設なども必要である。以上、「被災地における高齢者等のコミュニケーションと生活ニーズ」についての報告を終わる。

研究報告 その3

みんなの家集会所（共同スペース）について

報告者 井上 諒・神田 雄飛・上園 菜月

熊本県西原村の仮設住宅のB棟、C棟、D棟にある集会所を見学することができた。

1. B棟の集会所

B棟の集会所は、大きな窓があり開放的だった。中はフローリングのスペースと段差になって畳のスペースもあり、そこには子供が遊べるようなブロックや絵本などがたくさんあり充実していた。フローリングのスペースには入居者の方の意見を反映した大きなキッチンもあり広々としていた。また、大きなテレビもあり子供からお年寄りまでみんながくつろげるような空間になっていた。見たところ外には子供が遊べるようなスペースがなく、子供が集まってスポーツをするなど体を使って思いっきり遊ぶことができるような場所はなかった。集会所では、クリスマス会などの行事ごととも開かれているようだ。そのためか、子供たちはみんな仲が良く学年関係なく全員が友達といった感じだった。



2. C棟の集会所

C棟の集会所は、可動式の置き畳やテーブルや椅子などの家具があり、キッチンや冷蔵庫もあった。外には芝生が敷かれ子供たちが遊べる



簡易な遊具があった。トイレは外部から利用できるようになっており配慮がされていた。C棟の集会所は今回ボランティア活動を行った場所で、下足のまま入ることのできるいろいろなイベントを行っている場所である。

3. D棟の集会所

D棟の集会所は、「木の家」をテーマに作られており、壁一面に広がる本棚には絵本、漫画、小説といった様々な本が並べられていた。この本は昭和女子大学の協力により、「ホンノバプロジェクト」で集まった本である。私たちがD棟の集会所を訪れた時は、高齢の方がテ



レビを見ながらゆっくりと過ごしていた。利用者は主に高齢者で、普段から行事がない時はこのような使われ方をしているという。集会所の中には夏らしいひまわりが生けてあり屋内でも季節を感じることができた。花の資格を持っている町内会長が毎日替えている。フローリングのスペースと畳のスペースに分けられており、畳の上には座布団や脚のマッサー器や血圧計が置いてあった。高齢者の健康増進を目的とした取り組みが行われていると思われる。集会所内の8月の掲示物の中には、Pepperを活用したラジオ体操の案内が貼られていた。

4. まとめ

みんなの家集会所はいずれも木造で、とても温かみのあるものだった。また、キッチン、冷蔵庫、エアコンが完備されていた。B棟とC棟は子供を中心とした集会所で、D棟は高齢者を中心とした集会所になっていると感じた。全体的に見て簡易の遊具があっただけだったため、子供たちは屋内で遊ぶことが多いようだった。

研究報告 その4

災害後の生活に向き合う保健福祉施設等のあり方(西原村の施設)について

報告者 中窪 倫太郎・元 莉奈・町平 阿利奈

熊本県西原村の小森地区仮設住宅の仮設住宅及び地域支えあいセンターのあり方について報告する。私たちは、西原村社会福祉協議会が運営する西原村地域支えあいセンターの職員の方から話を聞いた。

～仮設住宅について～

熊本県の震災で大きな被害を受けた西原村の仮設住宅を見てきた。これまで、西原村の仮設住宅は全部で312戸建設されている。最も多い時で307戸の仮設住宅に被災者が入居しており、2018年8月現在では190戸までに減っている。そのうち30世帯弱ほどがこれからも仮設住宅に残るだろうと予想されている。仮設住宅が建っている土地は、元々、陸上競技場を建設する予定で、村が購入していた。そのため、すぐに建設することができた。土地の確保からしなければならない状況だったとしたら、被災者たちの生活はどうなっていたのだろうかと考えさせられた。



～仮設住宅の現状、地域支え合いセンター～

2018年8月現在、仮設住宅の住民は仕事を続けている世帯がほとんどであり、経済的な影響はそれほどないように感じられた。今後は、木造仮設住宅を改修（カーテンの取り替え、洗濯機を設置）した後、買い取られる予定である。

そして、仮設住宅の敷地に隣接して地域支え合いセンターが設置されていた（右写真は西原村地域支え合いセンターホームページより）。



十数名の職員が勤務し、住民のケアや見回りを行っている。また、生活に必要なお店（スーパー、ホームセンター、病院、美容院、弁当屋など）が揃っており、生活環境は整えられていた。

そして、被災した当時から棟は西原村の地域ごとに分けられていた。そのため、仮設住宅の隣人は顔見知りであり、人間関係のストレスは必ずしもなかったことが分かった。実際に、子供たちは元気に遊んでいた。お年寄りの方々も集会所に集まった方たちは、会話を楽しんだり、テレビを見たりしていた。笑顔で明るかったことが印象に残った。

～今後の課題～

今後の課題として、一般住宅への移住を進めていく中で、仮設住宅から、移住しない人が出てくるとい問題が考えられる。特に高齢者の多い西原村の仮設住宅の近くには、生活に必要なお店（スーパー、ホームセンター、病院、美容院、弁当屋など）が揃っている。そのため、生活しやすい環境から、お店も遠くなり明かり（街灯）も少なくなる一般住宅へ移動することに抵抗感がある人もおられると予想される。解決策として、県は、西原村の仮設住宅を県

営住宅に変更して、住民に家賃を払ってもらい、住んでもらうという策を考えている。このことについては、県と住民が話し合い、お互いに理解を深めていく必要がある。また、仮設住宅の近くに建設した山西災害公営住宅に移住してもらうという策も考えている（右写真）。

また、これまでに全国からたくさんの支援物資をもらっていた。しかし、全体的に食料品が多かったため、腐敗が心配されていることが分かった。貰いすぎて行き場のない支援物資もあるようだ。食料品よりも生活用品（オムツ、タオル、カイロなど）の方が需要があり、助けになることもわかった。



研究報告 その5

伊仙町における空き家活用の事例報告 ―地域の宿泊先として空き家活用―

報告者 鹿児島国際大学福祉社会学研究科 博士前期課程2年 前田 健吾

1. 国内の空き家活用に関する状況

国土交通省が平成25年に行った「住宅・土地統計調査」によって、日本の空き家数は約820万戸、空き家率は13.5%と過去最高を記録した。野村総合研究所の試算によると、2023年には、約1400万戸に膨らむという試算がある。国土交通省は、今後急増が予測される空き家対策のため、2015年に「空家等対策の推進に関する特別措置法」を施行して空き家を「建築物又はこれに附属する工作物であって居住その他の使用がなされていないことが常態であるもの及びその敷地」と定義した。そして適切な管理が行われていないために防災、衛生、景観などの地域住民の生活環境へ深刻な影響を及ぼしている空き家に対し、解体や立ち入り調査を行うことが出来るとした他、同法第6条において、市町村は、空き家等に関する対策を総合的かつ計画的に実施するため、「空家等対策計画」を策定できるとした。

しかしながら、この法律を作った所で空き家率は減るわけではないと私は考える。

というのも平成 25 年の「住宅・土地統計調査」で、住宅の担い手である総世帯数と住宅総数のアンバランスさが明らかになったからだ。平成 25 年の総世帯数は約 5,245 万世帯であるのに対し、住宅総数は約 6,062 万戸と大きく上回っている。この数字から読み取れるように既に住宅は、量的に充足しているのだ。

空き家の活用には様々な形態があるが、一般的には、リノベーションによって、民宿やゲストハウスなどの宿泊施設、カフェやレストランなどのコミュニティスペースとして活用されることも多い。しかし空き家の活用の担い手である人の数は 2008 年の 1 億 2,808 万人¹をピークに減少し始めている。今後は少子高齢化の進行により、出生数の減少と死亡数の増加により、長期的に人口が減少していく。国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」によると、2048（平成 60）年には 9,913 万人と 1 億人を割り込み、2060（平成 72）年には 8,674 万人になると推計されている。² 空き家の担い手である世帯以上に住宅総数が多い現状がある以上、活用は中々進まないと私は考える。

2. 研究の概要

（1）研究の目的

日本全体では、少子高齢化が進行し、人口減少が始まっているが、奄美群島に属する徳之島では、少し事情が違っている。人口減少、高齢化は進んでいるが、合計特殊出生率は全国的に見てもトップクラスに位置している。人は減り、老いていくが、子供はたくさん生まれているという、日本全体の傾向とは、少し違った環境での空き家の活用がどのように行われているかを明らかにすることを今回の目的とする。

（2）研究の方法

研究の方法は、空き家の活用を実際に行っている方へのインタビューを中心に行う。インタビューは、徳之島の伊仙町で、ゲストハウス「あむとう」を運営している NPO 法人いせん 1・1 の理事長と、ゲストハウス「あむとう」の運営に協力している不動産業者の A さんに行った。

（3）徳之島—伊仙町を研究の対象とした理由

徳之島は鹿児島市から南に約 468km に位置し、奄美群島に属する離島である。人口は島全体で約 2.4 万人、徳之島町、天城町、伊仙町の三町で構成されている。徳之島は「長寿と子宝の島」として全国的に有名であり、合計特殊出生率は、伊仙町が 2.81、徳之島町が 2.18、天城町が 2.12 と全国平均 1.44 を大きく上回っている。高齢化率（人口に占め

¹ 平成 20 年、総務省「国勢調査」より引用。

² 平成 24 年、国立社会保障・人口問題研究所「出生中位・死亡中位推計」より引用。

³ 2015 年、総務省「国勢調査」より引用。

る 65 歳以上の割合) は、伊仙町が 35.4%、徳之島町が 29.7%、天城町が 33.4%³ と全国平均である 26.6%を上回っている。徳之島 3 町の中から伊仙町を選んだとした理由は、合計特殊出生率が 2.81 と日本一であり、かつ 1 番高齢化が進んでいるという 2 点が理由である。

(4) ゲストハウス「あむとう」を選んだ理由

伊仙町には他にも、個人で運営している民泊やゲストハウスが存在するが、ゲストハウス「あむとう」は、法人が運営を行っている。個人ではなく、組織として空き家を活用している事に興味を感じ、研究の対象として選定した。

(5) NPO 法人いせん 1・1 について

この法人は、地域活性化の一端を担うために、シルバー人材センターの窓口となり、高齢者を中心としてシルバー人材活動を中心に行っている団体である。この事業の他、ゲストハウス「あむとう」の管理運営を行っている。

3. ヒアリングの内容のまとめ

(1) ゲストハウス「あむとう」が生まれた経緯

伊仙町が国から、シルバー人材と再利用資材を活用した空き家リノベーション（改修）事業の助成を受ける。島の暮らしを体験してもらい、島外からの移住者を呼び込もうと、国の補助事業を活用した試みである。350 万をかけて、築 40 年で 10 年近く空き家になっている物件のリノベーション工事を行い、2014 年 11 月にゲストハウス「あむとう」へ生まれ変わる。「あむとう」とは地元の言葉で集落の聖地を意味し、ゲストハウスの側に集落の聖地があることから名付けられた。

(2) ゲストハウス「あむとう」の概要について

ゲストハウス「あむとう」は、木造平屋一戸建てで間取りは 4 LDK の物件である。2014 年にオープンし今年で 4 年目を迎えている。宿泊料金は 1 泊 6000 円で、アメニティとして、ガスコンロ、冷蔵庫、電子レンジ、炊飯器、調理器具類、食器、テーブル、食器棚、布団（7 組）、洗濯機、掃除機、電気カーペット、ドライヤー、駐車スペース（乗用車 2 台分）が揃っている。他のゲストハウスやホテルのように 1 人 1 泊〇〇〇〇円という形態ではなく 1 棟貸しを行っているのはゲストハウス「あむとう」の大きな特徴である。

(3) 元物件の所有者とあむとうの関係

リノベーション前の物件の所有者は本土に在住していて、管理は伊仙町で不動産事業を行っている A さんが行っていた。行政がリノベーションする物件を探していた際、当時物件を管理していた不動産業者に声がかかった。そこで物件の所有者と行政間を不動産業者の A さんが調整を行い、リノベーション工事に至った。そしてゲストハウス「あむとう」に生まれ変わった物件は、地元の NPO 法人である「いせん 1・1」に運営委託が行われた。

(4) 自治体との関係

国庫補助である「シルバー人材と再利用資材を活用した空き家リノベーション（改修事業）」の終了後は、特に連携は取れていない。助成期間中は予算化されていたため、移住体験ツアーを行うなどの余裕もあったが、助成期間終了後は、NPO 法人「いせん 1・1」が独立採算で運営を行っている。

(5) 地域とゲストハウス「あむとう」の関係

助成を受けていたころは、移住体験を企画し、オプションとして地域住民と語る会などのイベントを開催していた。イベントの中で、ゲストハウス「あむとう」の宿泊者と地域の住民と交流を行えていたが、NPO 法人「いせん 1・1」に管理が移ってからは、人手も金銭も余裕がなくなり今はほとんど行えていないとのこと。

(6) 運営について

1 泊 6000 円 / 棟である宿泊料金を基に運営されている。NPO 法人「いせん 1・1」は、人手が足りないため、物件の管理や予約の窓口業務のみを行っている。というのも元々 NPO 法人「いせん 1・1」はシルバー人材センターの運営が本事業であるため、ゲストハウス「あむとう」の運営は、兼務で行っているという事情がある。シルバー人材センターとは、宿泊した後の清掃や、庭の草刈りなど物件の維持管理の部分で連携を取っている。

ゲストハウス「あむとう」の広報は、不動産業者の A さんが個人でソーシャルネットワークサービスであるフェイスブックやブログで広報を行っているという。なおこの広報に関しては、給与や謝礼金があるわけではなくボランティアで行っているとのこと。

(7) これまでの宿泊数について

過去 3 年間の宿泊数については、以下の通りである。

- ・平成 27 年度は、宿泊件数が 24 件、宿泊日数は 75 泊、延べ宿泊人数は 102 人。
- ・平成 28 年度は、宿泊件数が 24 件、宿泊日数は 128 泊、延べ宿泊人数は 102 人。
- ・平成 29 年度は、宿泊件数が 29 件、宿泊日数は 175 泊、延べ宿泊人数は 134 人。

	宿泊件数	宿泊日数	延べ宿泊人数
平成 27 年度	24 件	75 泊	102 人
平成 28 年度	24 件	128 泊	102 人
平成 29 年度	29 件	175 泊	134 人
合 計	77 件	378 泊	338 人

※ 平成 29 年の 12 月～3 月に、長期の貸し切りの客がいたため、宿泊日数が増加しているとのこと

(8) これまでの宿泊者の分析

平成 27 年度にオープンして 4 年目となり、当初の狙いとは違う層の利用が多いことが分かった。当初の狙いは、島の暮らしを体験してもらい、島外からの移住者を呼び込むために、ゲストハウス「あむとう」がスタートした。もちろん当初の狙いを目的にした宿泊者もいたが、元々徳之島出身で島外に出て月日が経過した方、その子供たちなど 2 世 3 世の方々が、帰省や冠婚葬祭や墓参りの宿泊先としての利用が目立った。他にも島外から、島内への工事などビジネス目的での宿泊客もあった。伊仙町には、大規模な宿泊施設がないため、当初の目的外で来た宿泊客も利用することもしばしばあったとのこと。

(9) 「あむとう」を運営したことで見えてきた課題と不安

課題として一番に挙げられるのは、資金的人員的に余裕がないことである。そのためゲストハウスを維持するのが精いっぱいであるという。管理運営費は宿泊料金でなんとか賄えているが、利益はほとんどなく、補修費の足し程度にしかないとのことであった。

資金的に余裕が無いことに起因している不安として、もし台風や災害などにより、保険のきかない範囲の補修が必要になると、運営ができなくなる事、築年数的にもあと 10 年程で住居としての限界が来ることなどが挙げられた。

(10) 今後の展望と取り組み

今後の展望を考える上で大切にしたいのは、当初の狙いである「島の暮らしを体験してもらい、島外からの移住者を呼び込むため」という理念的な部分である。当初の狙い以外の利用者も増えたが、何のためにこのあむとうが生まれたか？という原点を大事にしながら運営をしていきたいとのことだった。

またゲストハウス「あむとう」のある伊仙町には、ホテルなどの大型の宿泊施設が無く、民宿やゲストハウスなどの小規模の宿泊施設が数か所あるだけである。観光や帰省で伊仙町に来て、宿泊する場所が少ない状況は、「あむとう」の課題というより、伊仙町の課題であると認識している。現在の「あむとう」はマイナスを生まない努力しかできていないが、今後は伊仙町全体の宿泊業者が連携し、この課題に取り組む必要があると考える。

この課題を解決するため、2018 年 6 月に伊仙町の宿泊業者と不動産業者の A さんが伊仙町「伊仙町民泊推進連絡協議会」を立ち上げたばかりである。今後はこの伊仙町で始まった取り組みに、行政や地域住民と連携し、各地区に「あむとう」のような地域の宿泊拠点広がる事を願っているとのことだった。

NPO 法人いせん 1・1 では、現在シルバー人材センター事業と、ゲストハウス「あむとう」の管理を行っているが、他にも「島の宝伝承事業」として町内の子供たちの週末の活動拠点づくり事業や、「徳之島環境教育事業」として学校との連携により町内の子供たちに対する教育支援事業も計画している。資金的・人員的に現在難しいが、いずれ行いたいとしている。

4. 最後に

ゲストハウス「あむとう」の事例で特筆すべきは、課題や不安を抱えながら、4年間も法人として運営に成功していることだ。資金的にも人間的にも余裕がないなか、法人が担う部分を減らしうまく状況に合わせて事業を継続している。ただ同時に非常に惜しいとも感じる。資金的にも、人間的にも余裕があれば、当初のゲストハウス「あむとう」の目的である、島の暮らしを体験してもらい島外からの移住者を呼び込むための活動や、「島の宝伝承事業」、「徳之島環境教育事業」にも資金・人員を割く事が出来る。行政など公的な機関や地域の住民との連携を行い、資金・人員を充足できれば、より大きな効果をもたらす第2、第3の「あむとう」が生まれることになるだろう。

またゲストハウス「あむとう」の目的とは違った形で利用が増えていることにも注目すべきである。元々は移住したいというニーズに応えるためにゲストハウス「あむとう」を作ったが、実際に宿泊した方を見ると、冠婚葬祭や墓参りなどの帰省先だったり、仕事で伊仙町に来た人の宿泊先だったり、当初は想定していなかった人々のニーズがそこで満たされているのは大変興味深い。人口が都市部に流入し、少子高齢化、人口減少が進んでいる地域でも同じようなニーズが潜在しているかもしれない。空き家を地域の宿泊先として活用していく方向性が広がっていく事を願う。ゲストハウス「あむとう」としては、当初の今後の取り組みの動向に注目していきたい。



「ちょんまげ支援隊長」ツンさん講演会 ―「断続は力なり」―

文責 村上 光朗

昨年 2018 年に開催されたロシア・ワールドカップ。良い意味で期待を裏切り大活躍してくれた侍ブルーの実況中継に、日本国中の人々の目が釘付けになった。試合中継を続けるテレビカメラは、遠いロシアの地のスタジアムから必死に声援を送る日本人サポーターたちの様子も捉えていた。そのなかに、実にヘンテコな風体の二人を見つけて、思わず目が点になった人も多かったのではなかろうか。ひとりは、侍の甲冑を身に纏いちょんまげを被った人物。そしてもうひとりは、顔を白塗りにして「グー・チョキ・パー」のチョキの格好の着ぐるみに身を包んだ謎の人物である。この二人、「ちょんまげ隊長ツンさん」と「じゃんけんマン」という。

折しも、ワールドカップが開催される約 2 週間前の 2018 年 6 月 2 日（土）。この謎の二人がわが鹿児島国際大学に姿を現した。一体何のために？ なんと、社会福祉学会主催の学内講演会に駆けつけてくれたのだった。一体彼らは何者なのか？ そして、なぜそんな突拍子もない姿をしているのだろうか？

当日の講演内容をまとめた以下の文章を読んでもらえれば、彼らの横顔が少しだけ明らかになることだろう。

◇なぜ「ちょんまげ」を？

不思議なちょんまげと手作りの甲冑に身を包んだオジサンが、今回の学内講演会の主役である。ニックネームはさきほど書いたように「ツンさん」。ご本名を角田寛和さんという。

オジサンの本当の職業は「靴屋さん」。千葉県松戸にお店を構えておられる。ただしこのオジサン、趣味の世界に足を踏み入れ過ぎてしまった。それも少々どころの騒ぎではない。サッカーの熱烈サポーター役という「ディープ過ぎる深み」にである。すでに 20 年以上も、ワールドカップはいわずもがな、日本サッカーチームの行く先々に出かけては熱い応援を送ってこられた。

各国のサポーターたちは、自国が一目でわかる民族衣装や着ぐるみに身を包んで応援を送る。たとえば、ノルウェーチームは「バイキング」の衣装。オーストラリアチームは、カンガルーの着ぐるみで声援を送る。そこでツンさんも、彼らに負けじとばかりに、わが国を象徴する「サムライ」の格好をするようになったという。手作りの甲冑とちょんまげをつけての応援はすでに 10 年に及ぶというから堂々たるものだ。ところが、ツンさん、どこでどう間違えてしまったのか、もうひとつの新たな趣味の世界に迷い込んでしまうのである。それが、「ボランティア」である。

◇3・11ーちゃんまげ取られてまた来週！

2011年3月11日午後2時46分。世界を震撼させた東日本大震災が発生した。その約1週間後の3月19日。ツンさんは、「一世一代の偽善」(注：ツンさん自身の言葉による)を執行する。住居・家財道具一切を失い避難所生活を強いられている人々の様子を報道で知り、靴600足を被災地(塩釜一名取ー岩沼)に届けたのだ。それは、自身の靴屋という生業を活かした一回きりのボランティアのはず(・・)だった。

ところが思わぬハプニングが、ツンさんを東北へのボランティア・リピーターにしてしまう。それはちょっとした悪戯が引き起こした些細な出来事だった。被災地の子供たちと遊んでいる時、ひとりの子供が、「おい、ちゃんまげ！ ちゃんまげ見せろよー！！」と呼びかけてきた。ツンさんは、内心、「生意気な子供だな～」と思いながらも、その子の目線の高さまで屈み込んで、ちゃんまげを触らせていた。そのとき、その子が、「スポン！」とちゃんまげを引き抜いて、隠してしまったのだった。ツンさんは、「返せよ～！ 帰れないだろう～！」と慌てて叫んだそう。だがそのとき、ツンさんの心に「ハッ！」と浮かんできたのは、「ああ、この子は、僕に帰ってほしくないんだな」という思いだった。その思いに包まれた瞬間、ツンさんの口から、自身でも思いがけない言葉が吐いて出たという。「また来週やってくるからね！」と。もうひとつの趣味の深みにはまった瞬間であった。

◇非スーパーボランティアー「断続は力なり」

2018年の「流行語大賞」のひとつに「スーパーボランティア」がある。山口県周防大島で不明となっていた男児を発見した尾畠春夫さん(大分県出身)の代名詞としてクローズアップされた言葉である。65歳で生業の鮮魚店をたたみ、その後は報酬を一切求めず、各地で発生する災害等に駆けつけては、黙々とボランティア活動に従事する尾畠さんの姿は、ボランティア仲間内では「神」のような存在ともされている。

ツンさんは、3・11からの7年間、東北の被災地に実に100回以上通っている。ツンさんも一見すると「スーパーボランティア」のように見える。しかし、ツンさんは言う。「たった、100回です。7年間にですよ。月に勘定してみれば、たかだか1、2回のことでしかありませんから」と。ツンさんの好きな言葉に、「断続は力なり」がある。「三日坊主でもよい。インターバルがあってもよい。疲れたらボランティアの船から下船してもいいんだよ。むしろ疲れたときにボランティアなんかしたら、ボランティアしている相手に失礼だ」。ツンさんの偽らざる本音である。

また、ツンさんは、有償ボランティアにも積極的に賛同する。人のために頑張った対価としてお金を貰う。それはそれで立派なことではないかとの考え方だ。たとえば、英国の「オックスファム」(Oxfam International)は、救済活動も含めてさまざまな社会活動を行う一種のボランティア団体であるが、アドボカシー(advocacy：公共政策提言や権利擁護)なども含めてさまざまな顔をもっている。とりわけ、オックスファムは、ボランティア活動に対する対価としての寄附や募金活動、ショップ経営等も積極的に行っており、それらの膨大な資金は世界規模のボランティア活動資金として使用される。また、その活動に対しては、世

界中の NGO や民間団体が協力連携している。

ツンさんは、米国や英国では、NPO や NGO が学生の就職希望ランキングの上位にある点を指摘する。「官から民へ」。ツンさんは、マイクロソフト社の元会長で、現在、ビル・メリンダ・ゲイツ財団（注：世界最大の民間慈善基金団体）の代表であるビル・ゲイツ氏の例なども挙げ、いずれわが国でも福祉分野とこうした団体・組織との新たなハイブリッド化がなされることで、学生たちの就職ランキング図も大きく変化する（近いうちに NPO や NGO が学生の就職希望ランキングの上位を占める）のではないかと予言された。

もちろん、さまざまな形のボランティアがあって良いのだ。尾畠さんの「スーパーボランティア」は、「時間を無償で人に差し出す」というボランティアの原点ともいえる貴い姿である。そして、ツンさんにとってのボランティアとは、「自分が楽しいから」「自分が居てもいいんだ」ということを確認できる「自己満足のボランティア」なのだと自身で明言される。ただ、両者に共通しているのは「それなりに無理をしていない」ということだ。尾畠さんは、自身のボランティア活動をとくにスーパーとは感じていないはずだ。尾畠さんにとって、それはごく自然で無理のない（ボランティアそれ自体が）楽しい活動であることだろう。ツンさんも、ツンさんのスタンスにおいて決して無理はしない。「三日坊主ボランティアでもよい」。人に寄り添う活動の入り口に立つとき、ツンさんのこの言葉は、私にはボランティアの敷居を低くしてくれる励ましの言葉のように聞こえる。

◇ニーズと想定的重要性、そしてメディアに騙されないこと

ツンさんは、ボランティア活動や災害への忘備として、次の三点を強調された。

第一は、「ニーズを把握すること」。災害が発生した後、避難所に集まった人々には、まずは、「衣食住」への対応が必要となる。しかし、衣食住が一段落したところで、次に人々を一番喜ばすものは何だろうか？ ツンさんは、われわれに質問を投げかける。難しい質問だ。答えは「お風呂」。ろくなパーティーすらないストレスフルな避難所での生活をリフレッシュしてくれる最大のプレゼントは、「お風呂」なのだそう。自衛隊が用意してくれる大きなお風呂が、人々に癒しをあたえ、気持ちを和ましてくれるという。

2016 年 4 月に起こった熊本地震により、避難所生活を続けている人々に支給されていた毎日の食事メニューは、パンとインスタント食品の繰り返しであった。「温かいものが食べたい」「野菜が食べたい」という被災者たちの声に応えて、ツンさんたちは、「野菜たっぷりチャンポン」を調理し、振る舞い、大いに喜ばれたという。ニーズは時間経過とともに変化してゆくのだ。

昨年の西日本豪雨災害時にも、広島の被災地に「タオルが必要だ。タオルを送れ」という声がネット上で拡散し、現地には大量のタオルが全国から寄せられたのだそう。しかし実際のところ、それほど大量のタオルの使い道はない。現地では、大きなビニール袋一杯のタオルの山が築かれ、捨てるに捨てられない困った状態が続いたのだそう。善意は簡単には処分できないからだ。被災者の本当のニーズを把握することの困難さと大切さがそこにある。

第二は、「想定すること」である。「想定外でした」は、政治家の常套句だが、ツンさんは、

想像力を最大限に発揮して、「あらかじめ想定しておくこと」が、災害から身を守る道だという。たとえば、同じ水でも、「飲料水」としての水は、ペットボトルの何本かは大抵の家で買い備えていることだろう。それに、被災後72時間もすれば、給水車が到着する可能性も高い。だが、一番想定しにくいのは、「トイレの排水用の水」だという。そんなとき、お風呂に水を一杯に張っておくだけで、当面の排水処理はまかなえるのだそうだ。

そして、第三は、「メディアに騙されない」こと。ツンさんはこの点に関してとくに警鐘を鳴らす。メディア、とくにマスコミは、嘘の報道はしないものの、少数意見を針小棒大にクローズアップし、スクープとして報道することが多い。たとえば、東北大震災後、被災地に寄せられた「折り紙」や「寄せ書き」の類は、「腹の足しにもならないし、ゴミにしかならないから、もういらない」との人々の声があるといった報道がなされた。さらには、『頑張れ！』といわれるのにもう疲れてしまった。『頑張れ』なんていわないでほしい」との声が存在するとの報道も流れた。けれどもそれは確かに事実ではあっても、少数意見にしか過ぎないのだとツンさんは強調する。たとえば、ツンさんが思わずカメラにおさめた寄せ書きのなかの次の言葉。「頑張らないでひと休みして空を見てくださいね。私たちもいっしょだよ」。こうした言葉に励まされる被災者がどれだけ多いことかと、ツンさんは言う。「現場に出向き、自分の目で実際に見て、その上で考え、判断すること」。ツンさんの大事な哲学である。

◇熊本での活動 ―ネーミングライツ

鹿児島からいま一番近い被災地といえば熊本だろう。ここでツンさんが行ったボランティア活動は、実にユニークである。それはほとんどお金がかからないスマートなやり方である。一言でいえば、『ネーミングライツ』方式で横につながるボランティア活動である。ツンさんは、全国のサッカーのサポーターたちと横でつながっている。ネーミングライツとは、彼らの中で、何かの商売をしている人やお店を構えている人などの名前や商品名を宣伝するかわりに、たとえば5000円也のお金を寄付してもらう。あるいは、商品そのものを寄附してもらう。こうして集まったお金やモノをもとにして、屋台を開き、被災地の子供たちにタダでお菓子や商品を振る舞うのである。「屋台」は、お祭りを盛り上げる必須アイテムだ。被災地に開かれた屋台は、自然と子供たちに笑顔を取り戻させ彼らを夢中にさせる。

ただ、ツンさんは言う。ボランティアにはさまざまな形があって良いのだと。ツンさんが感心したひとつの実践例がある。福岡の大学生たちが熊本の被災地のプレハブ仮設住宅で暮らす子供たちに行ったボランティア活動である。彼らは一体何をしたのか？ それは、ただ、日がな一日、子供たちと遊んだだけである。だが、これも立派なボランティア活動であると、ツンさんは断言する。「今日ね、大学生のお兄ちゃんお姉ちゃんたちがね、僕らと遊んでくれたんだよ。楽しかったよ〜！」。子供たちが、彼らの両親にこのことを楽しげに語るとき、どれだけ皆が笑顔になり、空気が和むことか。各人が得意とすることで、他人のお困りごとにちょっとでも手助けが出来れば、それは間違いなくボランティアなのだ。ツンさんは、ここでもボランティアの間口の広さと敷居の低さを教えてくれる。

◇ネパールでの救援活動

2015 年 4 月にネパールで大地震が発生し、死者は 8000 名を超えた (約 9000 名)。ツンさんたちは、ネパールにも直接足を運び、ある品物を届けている。それは、使い古した中古の冬物の衣服である。それらをビニール袋に詰め込めるだけ詰め込み、成田空港から出発する。ネパールは高地が幾重にも続く国である。ジープでも行けないような山奥の村々も多い。集めた衣類をそうした村に届けるためには、現地の子供たちが歩いて運んでくれることも多いという。ツンさんが撮ってこられた写真には、真冬なのに垢にまみれた半袖の T シャツ一枚で過ごす子供たちの姿が写っていた。出来れば全員の子供たち、大人たちに衣類を手渡したい。しかし、持って行ける量には限度がある。支給が行き届かず、悲しそうな顔をした少年の視線が、鋭くつきささる。「僕の服はないの!？」と。たとえば 300 着近くの衣類を用意しても、ここでは焼け石に水に近い。小さな村でも 1000 名近くの人が暮らしているからだ。そんなボランティア活動を、ツンさんは、「偽善だと認識している」という。ツンさんにとっての最大のボランティアは、この地にビジネスを起し、きちんとした現地雇用を確保することなのだという。ただ、「施す」だけでは、施された側は、「求めること」ことに終始してしまう。ちょうど、西洋人たちが、アフリカなどの植民地の子供たちを憐れんで施しをしたことで、観光客に“money, please. money please”と、子供たちが物乞いを繰り返す悲しい現実を招いたようにである。だからツンさんたちは、あえて、自分たちの手から直接に衣服を人々に渡すことはしていない。村のトップの責任者や村長を介して衣類を分配してもらっているという。

ツンさんたちに同行していた 19 歳の美大女子学生の話も印象深かった。彼女は被災した子供たちのためにたくさんのクレパスを持参してきていたという。子供たちに絵を教えたかったからだ。けれども、彼女は悲しい顔をしてツンさんのところにやってくる。子供たちが、たった一色のクレパスでしか絵を描かないからだという。ネパールでは、学校教育の現場に、絵画や音楽といった情操を育むだけの時間的ゆとりはない。彼らは、土に石を使って直接絵を描いて遊ぶだけだ。だから、カラフルなクレパスを前にしても使い方がわからないのだ。それでも、その女子学生は根気よく子供たちに教え続け、また、子供同士でも教え合いが始まることで、ようやくにして色彩に溢れた絵が出来上がったという。

◇じゃんけんマン登場

今回の講演会には、いまやツンさんの盟友となった「じゃんけんマン」にも参加していた。じゃんけんマンは、子供たちのヒーローだから、年齢等はここでは不詳としておきたい。ただ、鹿児島国際大学の卒業生であることだけは記しておこう。本学の学生時代に創作ミュージカルにのめり込む内に、いつしか「じゃんけんマン」のキャラクターへと近づいて行ったのだそう。

ツンさんは、熊本の仮設住宅で子供たちと真剣にじゃんけん勝負するじゃんけんマンを見て信頼を深めたという。じゃんけんマンは、じゃんけんに勝った子供にはオリジナルシールをご褒美としてプレゼントする。ツンさんがこの時に驚いたのは、負けた子にじゃんけんマ

ンがしたことなのだ。何と罰ゲームとして「油性ペン」で子供たちの顔にいたずら書きをしていったのだという。子供たちは、だからこそ勝負に真剣になり、じゃんけんゲームに夢中になって挑んでくる。被災地の子供だからといって手加減したり、特別扱いしない普段着のじゃんけんマンの姿にツンさんは心動かされたという。

今回の講演会でも、映画・「MARCH」が始まる直前に、じゃんけんマンと学生たちとの一発真剣勝負が繰り広げられた。賞品は、ツンさんたちが作った「オリジナル手拭い」である。見事最後まで勝ち残ったのは、社会福祉学科の女子学生であった。

◇映画・「MARCH」のこと

映画「MARCH」は、福島でマーチングバンドに熱中する子供たちの姿を通して、被災した福島の姿と、福島の今とを描いた作品である。ツンさんが中心になって制作した30分ほどの短い自主制作映画であり、これといったナレーションもない。ときには画面がブレたりもする。マーチングバンドを懸命に頑張る子供たちの姿を、被災以降の福島の姿に重ねて、ありのままに映し出しただけの作品である。感動を生むようなドラマツルギーはあえて排除している。

この映画の素晴らしい所は、「元気な福島」も同時に描きこんでいることだ。3・11後に「相馬野馬追」が3日間で20万人もの人々を集客したなどということを、私たちは知らない。3・11は、確かに未曾有の悲惨な現実を生み出した。けれども、そこから立ち上がる人々の日々の営み、エネルギーに溢れる子供たちの現在も確かに存在している。この作品には、陰と陽、そのどちらもごく自然に映り込んでいる。そこが何よりも素晴らしい。

「MARCH」という題名は、①東北、そして福島の運命を変えたあの「3月」の意味と、②「前に進む」という意味をもつ「マーチングバンド」の両方の意味を込めて命名されたという。

愛媛県に招待され、青々とした芝生の上でマーチングバンドを展開する福島の子供たちの姿、そして、セレッソ大阪と、愛媛FCとの対戦で、愛媛FCを必死になって応援する子供たちの姿は、放射能やその風聞で苦しむ福島の人たち、そして福島を応援する多くの人々の心に、小さいが確実なエネルギーを送るものである。

この映画を観ることを通じて、私たちはどのような支援が可能になるのだろうか。ツンさんによると、大きく3つの支援があるのだという。それらは、①「観る支援」②「伝える支援」③「直接支援」である。まず、「観る支援」とは、「今日、この瞬間」に被災地福島の生活や子供たちを描いたこの映画を鑑賞することに他ならない。「無関心こそが一番の敵」と考えるツンさんにとって、まずはこの映画を観てもらうことが何より一番肝心なことである。

次に、「伝える支援」。それは、映画を鑑賞した私たちひとりひとりの発信にかかっている。SNSを通じてこの映画の感想を投稿することで、その感想がTwitterに上りリツイートされる。#eigamarchで投稿が可能となる。もちろん口コミも大事な伝達手段である。出来るだけこの映画を家族や友人・知人へと伝え広げてゆくことが、そのまま支援の形となってあらわれる。

最後が、「直接支援」である。この映画は、復興支援を目的としており、営利目的ではな

い。有料上映で得られたお金は南相馬市へと寄附される仕組みとなっている。ちなみに、2017年11月末の一年間で1,118,087円を寄付することができたという。「MARCH」は、国内では21都県で(今回の本学での上映が鹿児島県での初上映!)上映されている。目標は、47都道府県すべてでの上映であるが、上映は国内にとどまらない。海外でもすでに8ヶ国で上映され、なんと、映画祭にも出品され、大賞を受賞している(ロンドン国際映画祭2017最優秀ドキュメンタリー賞受賞およびニース国際映画祭最優秀監督賞受賞)。海外での上映はとくにこだわっているところだという。海外では、「福島=死んだ町(death city)」として喧伝されているのが、ツンさんは悔しくてならないからだという。福島の元気を世界に伝えたい。映画・「MARCH」はその一翼を担っている。

◇もうひとつの「MARCH」

ツンさんには、この映画とは別にもうひとつの「MARCH」(福島の今を全世界に知ってもらうための活動)がある。それは、サッカーワールドカップに被災地の中学生数名を招待するという支援活動だ。2014年ブラジル大会では、石巻市牡鹿半島の中学生4名をブラジルに無料招待している。お金ももちろんかかる。それは、インターネットを通じた募金や、さまざまな形の寄附によってまなかつている。このミッションの主目的は、3・11で苦しむ東北に対して全世界の人々から寄せられた善意に対して、子供たちからも「感謝の気持ちを伝える」ことであった。

そして、今回、2018年のロシアワールドカップにも、やはり中学生を招待している。今度は南相馬の中学生たちだ。この大会に南相馬の中学生を連れて行く主目的は、4年前よりも少しだけ変化している。それは、「感謝の気持ちを伝える」だけでなく、映画・「MARCH」がそうであったように、「元気な福島を知ってもらうこと」であり、彼ら中学生たちに課せられる使命は、Ambassador(親善大使)であるとともに、「おもてなしの心」を育むこと。そして帰国後に、体験報告会を開いて、自分たちの経験や思いを地元の人々(とくに同じ学校の友人たち)に伝えることである。

もしも出来ることならば、被災地の子供たち全員を連れてゆきたいのはやまやまである。しかし、それは非現実的な願望でしかない。わずかな人数の子供たちであっても、彼らを海外に羽ばたかせてあげることで、まだあちこちがバリケードで封鎖されている福島の閉塞感を少しでも開放したい、というツンさんの思いがそこにはある。なぜ、南相馬市なのかといえば、ツンさんの「人との不思議な縁」を大切にしたいという思いも働いている。全世界から応援を受けて育った福島の子供たちが、ロシアの地で日本や他国のサッカーチームを必死になって応援する。それは「応援の恩返し」のようなものなのかもしれない。

講演の最後で、ツンさんは、聴衆の学生たちすべてに感謝の気持ちをあらわしてくださった。それは、信頼する良きパートナーであるじゃんけんマンが学び育った鹿児島国際大学に是非来てみたかったというツンさんの熱い思いに対して、真剣に向き合って傾聴してくれた社会福祉学科を中心とする若者たちへの心からの感謝の言葉であった。

「この講演で、たとえ1mmでもボランティアのイメージが変わったのなら嬉しい」。講演

の最後に述べられたツンさんのこの言葉は、講演を聞いた学生たちひとりひとりのこれからの実践と学びによってきっと証明されることであろう。

*（ツンさんのボランティア活動とこの講演会に触発されるかたちで、中山慎吾教授を中心に、熊本の被災地へのボランティア活動が企画され、多くの成果を残した。これについては、本誌の「自主研究助成」の頁を開いて読んでいただきたいと思います）。



当日の講演会風景（713 教室）



講演会後の「茶話会」
の席でのツンさんと
じゃけんマンだよ。



2018年11月23日(金)の「勤労感謝の日」。社会福祉学科の「新たな企画」がスタートした。

「一日大学生体験」である。大学が行っている「オープンキャンパス」とは異なる社会福祉学科独自の試みである。以下、この企画の責任者である岩崎房子先生にその趣旨を述べてもらうとともに、インタビュアーとして同行した上村義歩君（社会福祉学科3年生：『ゆうかり』編集委員）に、当日参加した中高生たちの生の声や感想をレポートしてもらう。

一日大学生体験

岩崎 房子

趣旨

このイベントは、大学の平常授業日に実施し、高校生（中学生含む）に鹿児島国際大学のキャンパスライフや社会福祉学科の授業やゼミ体験、大学生との交流をとおして、「大学生」や「社会福祉学科」のイメージを描いてもらうこと、また、福祉に対する興味・関心を持つってもらうことを目的として企画しました。

今後の展望

「一日大学生体験」は社会福祉学科の初めての試みでした。オープンキャンパスとの違いを出すために、“大学生の若い力を前面に出そう”と考え、当日の進行等は、3・4年生34人の協力を得ました。参加した中高校生21人（1人は中学生）の満足度をみると、その90%から“大変満足”という評価をいただきました。「先輩方とも話しやすく、時間が充実していた」「疑問に思ったこと等も細かく教えて頂けて、とても勉強になった」「この体験で大学に行きたいという思いが強くなった」「社会福祉学科の良さについて知ることができて、とても楽しかった」「大学に行くかを迷っているため、よい経験になった」などの声が聞かれ、楽しみながらキャンパスライフや社会福祉学科のイメージを描いてもらえたようです。これらの参加者の反応をみると、来年度以降も開催する意義は大きいと考えます。

今回の中高生の参加理由には、「大学に行くか迷っていた」「国際大学を目指している」「福祉への興味」「キャンパスライフへの興味」「大学生活の雰囲気を知りたい」「進路のヒント」などがあげられています。来年度は、このようなアンケート結果等を参考にしつつ、より参加者のニーズに応えられるよう微調整していく必要があると思います。それから、何と言っても最大の課題は“広報”です。今回は高校のみに広報を行いました。来年度は中学校にも広報を拡大してもよいのではないかと思います。そうすると、当然中学生にも理解できる内容に配慮する必要性は生じてきます。また、広報の手段や申し込み方法等の再検討も必要になると思います。来年度も学生と教員が一丸となって頑張りましょう。

「一日大学生体験」 同行レポート

上村 義歩

「一日大学生体験」は、社会福祉科初の試みで、中学・高校の生徒の皆さんを鹿児島国際大学のキャンパスに招待し、キャンパス内の探索やゼミ体験、それから在学中の学生や卒業生の方による学生生活や職業生活のプレゼンなどに参加してもらうというものです。

参加いただいた生徒の皆さんは中学生1名も含めて21名の方々でした。今回はサポート役の学生が案内しながらキャンパス内を一緒に回りました。また、今後の社会福祉科の発展に繋げていくために、ときどきインタビューをさせてもらったりもしました。

当日のスケジュールは次のようでした。

- 10:15～
- ・高校生と大学生との合同によるグルーピング&自己紹介・ミーティング
 - ・キャンパス探索・・・図書館、介護実習室、学部長室、研究室、2階ゼミ室など
 - ・学科授業体験・・・後期金曜日の1限～2限目の授業
- 11:30～
- ゼミ体験・・・テーマ 「ノーマライゼーションについて」 【蓑毛先生】
- 12:00～13:00
- 昼食・・・高校生&大学生一緒にピーチピットで食事
- 食後に各グループに分かれキャンパス内の探索
- 13:00～14:00
- 大学生活のプレゼン
- ① 学友会を頑張ってます！ 【3年 森 厚貴くん】
 - ② 学業とアルバイトの両立を頑張っています！【3年 黒木 大雅くん】
 - ③ 学業と学友会とバイトを両立！ 【3年 竹宮 智子さん】
 - ④ 熊本震災のボランティアに行ってきました！【1年 池田 健真くん】
 - ⑤ 介護施設で勤務しながら頑張っています！【2年 佐々木 博基くん】
 - ⑥ サークルにも力を入れながらダブル資格取得を目標に頑張っています！【4年 東 知可子さん】
 - ⑦ 社会福祉学について 【4年 齊籐 真也くん】
 - ⑧ 卒業生（社会福祉士）【前田 健吾さん】
 - ⑨ 卒業生（介護福祉士）【紙屋 茜さん】
 - ⑩ 卒業生（精神保健福祉士）【祝迫 里奈さん】
 - ⑪ 卒業生（教職）【福留 詩織さん】
- 14:00～14:45
- クッキータイム・・・お茶を飲みながら中・高校生と大学生の意見交換会
- 14:45～15:00
- 集合写真撮影、アンケート記入、学生代表挨拶、学科長あいさつ、終了

昼食を学内のレストラン「ピーチピット」で済ませた後、キャンパス内を探索してもらいました。探索中の生徒さんにインタビューし、「印象に残った場所や気になったことなどありましたか？」と質問してみると、フィールドハウスや附属図書館が想像以上にとても大きな建物で驚いたという声があったり、建物間の移動距離ってこんなにあるんですねという声もありました。

ゼミ体験では蓑毛教授の授業に参加してもらいました。社会福祉学科の主なカリキュラムについての説明のあと、個人、グループワークを用いて「ノーマライゼーション」をテーマにして学んでいきました。「このゼミ体験を通して勉強になったことなどありますか？」と質問してみると、手話を使って、「翼をください」の曲を歌ったときに楽しかったなどの声や、「共生社会を実現するためにどうしたらいいのか」という問いにみんなで考えることができ、一層理解を深めることが出来た」という回答もありました。



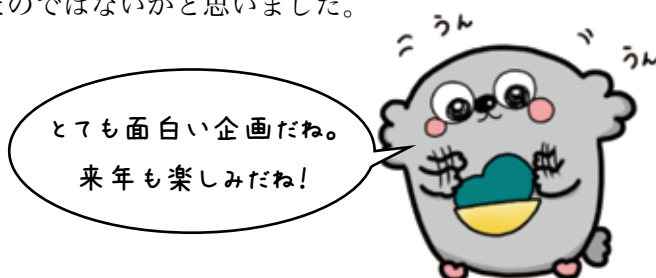
午後は本学科の大学生、卒業生によるプレゼンを聞いてもらい、そのあとは今日体験してもらったことを含め、お互いに意見交換を行いました。「大学生のプレゼンを聞いて参考になったことなどありましたか？」と質問すると、「実際に学業やアルバイト、サークルを両立している大学生の生活サイクルなどを聞いてとても参考になった」という声や、学生の中



には、熊本震災のボランティアに参加したり、介護施設で勤務しながら大学生活を送っている人もいることを知り、その活動範囲の広さにとても驚いたという声もありました。「今日の一日体験どうでしたか？」という問いに対しては、キャンパスの探索であったり、ゼミ体験、プレゼン、クッキータイムを通して、大学に一層興味が湧いたという回答や、サポートしてくれた大学

生が優しく接してくれたという声がありました。

今回の一日大学生体験を通して、参加してくれた中高生の皆さんには、大学、そして社会福祉学科がどういうところなのか、またどのような活動、学びをしているのかなど、少しでも知って頂けたイベントになったのではないかと思います。



社会福祉学科の社会調査実習ー過去現在

高橋 信行

社会調査実習という科目は、もともと現代社会学科が産業社会学科と言われていた時代から学科の重要な科目として設定されていた。それが、社会調査士指定科目として新たに生まれ変わる中で、社会福祉学科の選択科目となった。

私が赴任した頃、当時の社会福祉実習報告書について、感想文じゃないかといった類いの批判を社会学系の教員から聞かされたことがある。確かに当時の社会福祉実習報告書は、各自1ページで後半は実習施設に対するお礼などの文が並び、社会事実の究明を調査という手法で明らかにし、客観的手続きで仮説を検証するような意志をもった（実際にそうだったかはともかく）研究的側面をもつ報告書を作る側からみると、社会福祉実習の報告書はいかにも稚拙に思えたのかもしれない。確かに科学的なものの見方をする上で社会調査実習は一定の役割をもつだろう。

しかし別の側面からも社会福祉学科に選択科目になったことをとても喜んでいた。それは、福祉系実習に興味をなくした学生、資格の重層化を考える学生のニーズにも答えられるだろうと考えたからだ。また実際に実習生の中には、そうした視点から受講する者も多くいた。私が関わった研究テーマを年代別に書き入れると以下ようになる。

2010年度 枕崎市一人暮らし、高齢者夫婦世帯高齢者調査

2011年度 児童養護施設調査（天羽教授担当）

2012年度 福祉学生の進路選択と就職（鹿児島県社会福祉士会員を対象にした調査）

2013年度 過疎集落と社会福祉ニーズ1（南大隅町島泊地区住民調査）

2014年度 過疎集落と社会福祉ニーズ2（南大隅町滑川校区住民調査）

2015年度 過疎集落と社会福祉ニーズ3（鹿屋市吾平町神野地区）

2016年度 伊敷団地高齢者調査（鹿児島市伊敷6、7丁目）

2017年度 獅子島調査（長島町獅子島）

2018年度 高齢社会の在り方調査（鹿児島市大明丘地区住民調査）

過疎地域をフィールドにした実地調査を多く行った。2018年度の大明丘調査が、社会調査実習の最後になるのは、大変残念なことだ。社会調査の統計処理では定評のあるSPSSが百台分もあるのに、宝のもちくされである。社会的には、ビックデータに対応できる人材の必要性からデータサイエンス学部が新設されており、理系の国立大学が情報と統計を軸に、社会調査士資格を持たせている時代である。

情報処理技術としての量的データの側面でも、ナラティブアプローチとしての質的データの分析でも、社会調査実習の持つ意味はますます重要性を増している。全学的な共通科目としても、学生が履修できるよう復活できることを願うところである。

【写真は、鹿屋市神野地区公民館にて社協職員、地元住民と夕食をとる社会調査実習生たち】
(神野調査)



サヨナラ「社会調査実習」。いずれまた、全学的な復活を！

村上 光朗

「社会調査実習」は、鹿児島国際大学の前身である鹿児島経済大学に「社会学部」が創設された昭和 57 年度に科目として新設された（「現代社会学科」の前身の「産業社会学科」の科目として設置されていた）。記念すべき『社会調査実習報告書』（「南西日本の社会と文化」）第一号が出されたのは、昭和 60 年 3 月のことである。その後、「社会調査士」資格の導入とも関連して、社会福祉学科でも「社会調査実習」が受講可能となった。

実に約 40 年間にも及ぶ伝統ある授業科目であり、各年度に発行される報告書のバックナンバーの数もそれに比例している。けれども、産業社会学科が「現代社会学科」と改称され、その後、現代社会学科が廃止されるとともに、大学のカリキュラム改革後に誕生した「新カリキュラム」の一覧からこの科目が廃止されることとなった。したがって、「旧カリキュラム」が適用される今年度（2018 年度）が、「社会調査実習」の最後の年となる。伝統あるこの科目を失うことは実に悲しいことである。これまでこの科目を担当してくださった先生方に深い敬意を表するとともに、「社会調査士」関連科目を長年にわたってご担当いただいた諸先生方に心からお礼を申し上げたいと思う。

さて、高橋信行教授が述べておられるとおり、「社会調査実習」の科目廃止（それに付随する「社会調査士」資格課程の廃止）は、時代に逆行していることは明らかである。振り返ってみれば、科目存続のために訴えかける努力と熱意が自分自身に不足していたこともまた事実である。この点、慚愧の念を禁じ得ない。しかし、すでに廃止となつたいまは、これを真摯に受けとめるとともに、高橋先生が望まれているように全学的な共通科目として、学生が履修できるよう復活できることを願うばかりである。

以下は、今年度の村上班の報告書内容からの抜粋である。

【本年度のテーマ】「メディアのなかの屋上（その2）ーカレードスコープとしての屋上風景」

屋上愛好家は数多く存在するものの、それを社会学的な俎上にあげて論じた研究者は稀有である。だがすでに 1990 年代半ばの時点において、屋上のもつ重要性について言及したひとりの社会学者がいた。異端の社会学者とも称される宮台真司である。

宮台は、屋上という場所の特異性を、「密室的開放」として表現する。それは、「開放的密室」の逆転したメタファーとして語られる。「出入口の鍵を締めれば完全な密室となる屋上は、しかしまわりに開かれていて街中を見渡すことができ、街中の音を聞くことができる。この『開放的密室』こそは、私たちの『どこへも行けるが、どこへも行けない』という現実そのもののメタファー」（宮台 1997、118 頁）なのであり、「どこへでも行けそう」なのに「どこへも行けない」という「開放的密室」は、われわれを苛立たせるだけでしかない。だからこそ、このメタファーを逆手にとって、「どこへでも行けない」のに「どこへも行けそう」に感じられる「密室的開放」の場として屋上を開放することが宮台の提唱する自己解放のための戦略的方途となる。まさに「終わりなき日常を生きる」ための「読み替え」に他ならない。

学校やマンションをはじめとする屋上の多くがロックアウトされるか、リスクがことごとく排除された形での快適空間化されてきている（たとえば、アニメ作品『君の名は。』で登場したような主人公が楽しくランチする屋上や、フットサル場やスイミングプールなどのスポーツ施設と化した屋上など）。その一方で、メディア作品のなかに登場する屋上には、宮台の言う「密室的開放」の夢がいまだ濃厚に漂っているように思われる。それは優れたメディア作品の多くが、「〈ここ〉を〈ここでないどこか〉へと『読み替える』こと」（宮台 2016、25 頁）をフィクションの世界において実現することをモチーフとしていることと無関係ではないであろう。「密室的開放」のイメージは、メディア作品の目指す理想とほとんど同根だからである。だからこそメディア作品は、かくも多くの屋上シーンを登場させ、夢想化し、具現化するのかもしれない。（以下続く）

（参考文献）

- 袁原敬・宮台真司、2016 年『まちづくりの哲学ー都市計画が語らなかった「場所」と「世界」』ミネルヴァ書房
宮台真司、1997 年 8 月、『世紀末の作法ー終ワリナキ日常ヲ生キル知恵』メディアファクトリー

【ひとこと】

今回の調査実習では、メディア作品の中に登場する屋上シーンを取り上げ、それらの屋上シーンにおいて主人公たち登場人物が体験している、あるいは彼らに見えている「屋上における風景（心象風景）」や、屋上が彼らにもたらす「場所としての意味」を問い、その内容を考察している。参加してくれた学生は 4 名（久木田直人さん、西星哉さん、前蘭飛鳥さん、宮田竜成さん）である。

授業では、屋上が登場する映画やアニメ作品を各自が紹介し、それらを鑑賞するとともに内容に関しての意見交換を行うことで、屋上シーンが果たしている役割や、時空間としての屋上の意味についての考察を深めていった。作品鑑賞の時間は本当に楽しいものであったし、鑑賞後の意見交換に関しても、各自が得意とするジャンルからの鋭い意見が飛び出して大変スリリングな時間となった。内容について興味をもたれる方は、2019 年 3 月に出される報告書に詳細が記載されているので、是非ご覧いただきたい。

「大学猫」の考現学

有園 菜央・佐々木 晶

🐾 はじめに

こんにちは。このページを任された1年生2人組です！入学してから早くも1年が過ぎようとしています。この大学で生活していて、利用することの多い5号館・7号館付近では猫を頻繁に見かけます。気になったので猫について書くことにしました。今回はその中でも特によく見かける「くつした猫」（白いくつしたを履いているように見えるので私たち二人が付けた愛称です）に焦点を当てて紹介させていただきます！

この子がその「くつした猫」です！もふもふです（' 艸 ' *）



可愛いですね～いつまでも眺めていられます。まあ、講義があるので‘いつまでも’は出来ないのですが…。

🐾 IUKの大学猫

突然出てきた「大学猫」ってなんだよって方に軽く説明すると、大学の敷地で生きている猫のことです。そのままですね！大学教職員や学生が保護活動をしているところもあるようですが、IUKでは保護されていないようです。まあ、世の中、猫が嫌いな人もいますし、やっかいもの扱いもされたりしていますし、仕方ない側面もあるのかもしれませんがね。

さて、この猫について雑談していると当然出てくる疑問がありますね。そうです、そもそもこの猫いつからいるんだ？という疑問です。この疑問を解消するべく、私たち1年生ペア

は探索を開始しました。まずは突撃インタビューを敢行。本学の猫について詳しい5号館考古学実験室の中園聡教授と助手の平川ひろみさん（お二人ともとても優秀な考古学研究者です）から貴重な情報をゲットしました。さらには、「くつした猫」をよくかわいがっている学生の中村さんを村上先生から紹介していただき、話を伺ってきました。

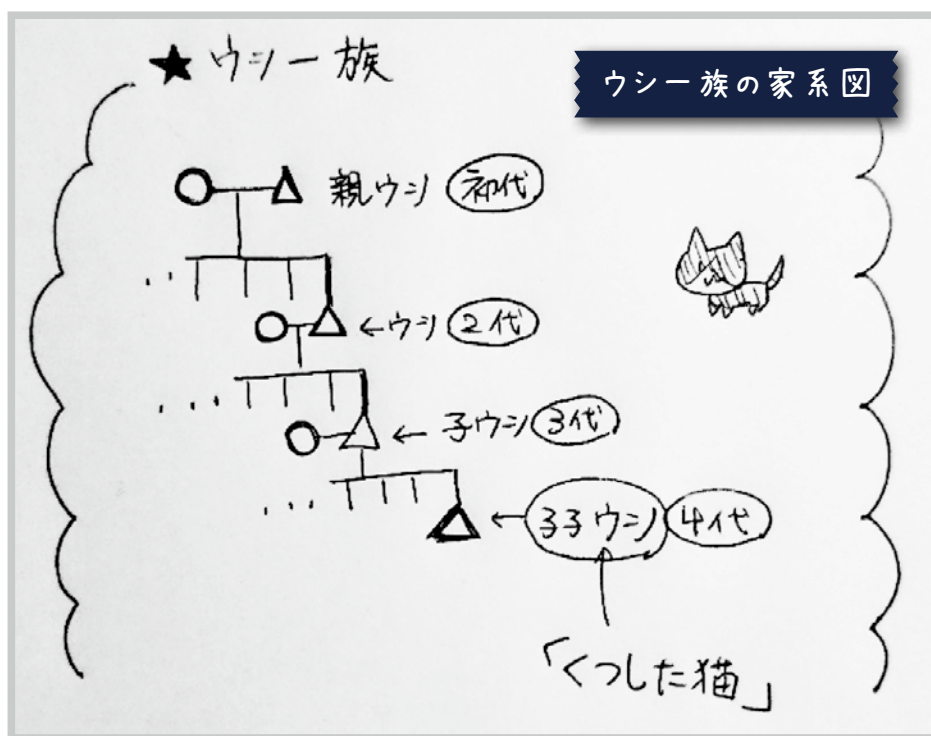
そんなこんなで伺った話を小見出しごとに書いていきます！

🐱 私たちが言う「くつした猫」は4代目だった

なるほど～そうだったのか～で流す人もいるかもしれませんが詳しく書きますね。そもそも最初に載せた写真の猫は中園教授曰く4代目ということですが、私たちはそんなに世代交代してたんだ、と驚きました。あっ、教えてもらった家系図？系譜？を載せます。これです。

教授の話と絵をもとに書いたものです。ざっくりわかれば良いと思ったので、簡単に書きました。

親ウシ？なにそれ？わけがわからない？



色々疑問はあると思いますが、この「ウシー族」については次の小見出しで紹介します。

🐱 中園教授と「くつした猫」の一族の関係は？

それはある豪雨の酷い年のことだったそうです。その地名の通り坂の上にあるIUKのキャンパスは雨が降ると地面に滝のように水が流れます。地面がそのような状態ならば、排水溝はどうなのか。そう、川ですね。川が流れるが如く排水溝の中には激流が流れていました。

当時、排水溝の中には猫一家が住み着いていたそうです。猫はよく側溝の中でじっとしていることがあるらしいのですが、それは側溝の中がほどよく温かいからだそうです。

話を戻しまして、雨の降りしきる中、川のようにになっている排水溝の中にいる猫たちはどうなるのか。…流されるしかありませんよね。

中園教授は親猫の必死に鳴く声を聞いて見に行ってみたそうです。するとそこには水の中を流されていく子猫たちが。中園教授が水の中から掬い（救い）上げることができたのは一匹の子猫だけでした。子猫は水を飲んでおり、仮死状態だったそうですが逆さにして水を吐かせて蘇生したそうです。こうして、ウシ一族は存続したのです（「ウシ」とは考古学チームが命名した愛称）。

実際に子猫たちが流されたと思われる排水溝の写真がこちら↓



中園教授の研究室の窓の真下の排水溝で救出したそうです。間一髪！！

🐾 昔の猫たち

私たち（一年生）はあまり想像できなかったのですが、昔、IUKのキャンパスには今よりもたくさんの猫がいたそうです。

15年ほど前、アメリカン・ショートヘア系の猫を含む様々な毛皮の猫たち（おそらく雑種）がいました。彼らは私たちには分かりませんが面白おかしく暮らしていたと思われます。しかし、ある日彼らは突如として大学構内から姿を消しました。1匹もいなくなったのです。中園教授はこの時を【大量絶滅期】と呼んでいました。何故唐突に猫たちがいなくなったのかは定かではありませんが推測はできますね！怖しや怖しや……

そして鼻長の一族が隆盛を誇ります。鼻長の一族とはその名の通り、なんだか鼻が猫にしてはやけに高い長い猫たちのことです。もちろんほかの種類の猫たちもいたと思われますが、中園教授の印象に残ったのは鼻長の猫たちだったようです。たくさんいたのでしょうね。そうしてさらに時代はウシ一族へ…。王朝交代のようにすぐ別の種類の猫たちが繁殖していきました。

さて、今現在はこちらの猫たちも昔みたいに増えるのでしょうか？そしてまたなくなるのでしょうか。私たちはどうすればいいか考える必要があります。

🐈 中園教授と平川さんの小話

「くつした猫」の他に中園教授が海外の大学の話もしてくれました。

教授が台湾大学に行った時のこと、台湾大学の人類学科の建物の玄関の前で一匹の犬が寝そべっていたそうです。台湾大学の教授にこれ何？と聞いたらこの学科で飼っている犬だと言ったそうです。どうやら学部ごと、学科ごとに犬を飼っているらしいのです。まあ、正式に飼っているかはわかりませんが、結構面倒を見ているようです。また、外国のホテルのガーデン、バイキングをしているところでは犬が普通に寝転がっているそうです。そのバイキングを利用して世界各国の研究者たちが集まって食事をすることもあるのですが、そんなところの床に犬が寝転がっていても誰も文句を言わなかったそうです。教授はそこで日本と海外の文化の違いを感じたそうです。

平川さんの話ではケンブリッジ大学かオックスフォード大学かは忘れたが、門を入っていくと講義棟があって中央に芝生があるそうです。その芝生を学生は絶対に踏んではいけません。踏んだ瞬間に警備員に笛を鳴らされるそうです。その芝生を踏んでいいのは Knight などの称号持ちや、ノーベル賞クラスの業績がある人、そして、**犬猫のみ**。やはりここでも文化の違いを感じますね。

私たちの大学の名前は鹿児島国際大学です。日本だけの価値観だけでなく海外の価値観についても考えられるような学びが大事で、これらのことを考えるためにも、猫たち、自然動物たちの存在はとても大切だと中園教授と平川さんは強調されます。繰り返して書きますが、私たちはどうすればいいのかを今一度考える必要があります。

🐈 中村さんと「くつした猫」の出会い

「くつした猫」をかわいがっている経営学科3年の中村美紀さんにお話を伺いました。

ずっと前から猫の存在は知っていましたが、明確に「くつした猫」を認識し、かわいがり始めたのは今年度の9月下旬頃からだそうです。

もともと猫に対して苦手意識をもっていた中村さんですが、嘉例川駅の観光大使、「たぬき猫にゃん太郎」と出会い、触れ合ったときの猫の毛並みと温かさに感動したそうです。そして、身近に触れ合える猫を探し、「くつした猫」と出会いました。中村さんは「にゃん吉」の愛称でとてもかわいがっています。



経営学科3年 中村さん

🐈 中村さんと「くつした猫」のふれあい

「くつした猫」と出会ってから記録をつけていらっしゃる中村さんですが、1日3～5回

は「くつした猫」に会うため5号館に訪れます。とはいえ、「くつした猫」は必ずしもいるとは限らず、運が良ければ5回中3回会えるとのことでした。出会えた時は短くても15~20分は5号館1階の学生ホール前のソファで「くつした猫」から離れられなくなってしまうそうです。

また、「くつした猫」がいても他のファンの方がすでに撫でて可愛がっており、撫でる順番待ちをすることもあるそうです。「くつした猫」の人気は高いようです。



🐾 とても人懐っこい「くつした猫」

「くつした猫」はとても人懐っこく、近寄っても逃げることはほとんどありません。学生が5号館1階の学生ホール前のソファに座ると自分からやって来て横に座ったり、学生の膝に乗ってきたりすることもあるそうです。中村さんは膝に乗せるのは爪が怖くてできないそうですが、最高2時間程「くつした猫」を撫でていたこともあるそうです。(その間「くつした猫」は夢の中) 学生の中には「くつした猫」を膝に乗せて携帯で電話する人さえいます。



教室を見学する「くつした猫」

また、「くつした猫」が5号館1階を歩いていることは珍しくないのですが、去年の7月のお昼休みに、5号館の隣にある7号館1階の教室に侵入したこともあるそうです。

🐾 幸せを運ぶ!? 「くつした猫」

このようにとても人懐っこい「くつした猫」ですが、「くつした猫」は学生に癒しだけではなく幸運も与えてくれるそうです。5号館の1階にいらっしゃる事務の山口由里子さんの話によると、資格試験前に「くつした猫」を撫でて「よしっ!」と試験に向かう学生も少なくないそうです。今回、お話を伺った中村さんも、インターンシップの選考結果を見る時に、まず「くつした猫」を撫でてから、その後で結果を見たら受かっていたとのこと。「くつした猫」には御利益があるようです。しかし、受からなかった時に「くつした猫」のせいにしたくないので、受けた後の結果を見るときだけに撫でているとのこと、で、「くつした猫」には幸運というよりは勇気を貰っているのかもしれないね。

🐾 おわりに

今回、お話を伺ったのは猫に対して好意的な意見をもっている方々のみでしたが、糞尿や病気、過剰な繁殖やアレルギーなど良いイメージだけではないのも事実です。

しかし、だからといってただ嫌うだけで果たして良いのでしょうか？

「大学猫」は、せっかく大学構内に居着いてくれた大切な隣人です。共存の道の模索や課題解決のため、彼らのお世話をしたり、管理をしたりする団体が必要かもしれません。



新入生歓迎行事

本年度も、恒例の新入生歓迎行事を、平成 30 年 4 月 4 日（水）に行いました。

平成 30 年度入学式終了後、正午から 13 時 30 分まで、ユーカリ会館 2 階ラウンジにおいて、新入生 72 名の入学を祝い、歓迎しました。

入学生と保護者、教職員合わせて 150 人ほどの参加がありました。例年以上に保護者の方々の参加があり、大いに盛り上がりました。

新入生からは、「入学式が終わり、いよいよ大学に入学したという実感が湧いてきた」、「引越しがまだ終わっていない。身の周りの整理をして、早く落ち着いて学べるようにしたい」、「福祉に関する勉強を頑張りたい。4 年間あっという間なので、悔いのないように過ごしたい」、「社会福祉士になりたい。勉強とアルバイトを両立させたい」とキャンパスライフに期待を膨らませていました。

また、保護者からは、「入学式を終えて、ほっとしている。健康に留意してほしい」、「初めて親元を離れて暮らすので心配。一人での生活はよい経験になるので頑張ってもらいたい」、「子供の夢は福祉関係の仕事に就くことだ。夢が叶えられるように努力してほしい」など、我が子に対する不安と期待が入り混じった思いを伺うことができました。

大学生活が 1 年過ぎようとしています。大学卒業まで 3 年間ありますが、あっという間に卒業はやってきます。入学式のときの気持ちをもう一度思い出し、これからも日々の生活を充実したものにしてほしいものです。（文：古賀政文）



ソーシャルワーク実習の感想およびコメント

社会福祉学科では、社会福祉士国家資格の受験資格取得のために、3年生のときにソーシャルワーク実習を行う必要があります。今年度の実習について、分野ごとに、学生の皆さんからの感想や担当教員のコメントをいただきました。

障害児者分野 山下利恵子先生担当

障害者支援施設での実習を通して

社会福祉学科3年2組4番 神野 志織

私は障害者支援施設で約一か月間の実習を行いました。実習では、日中活動を利用者の方たちと一緒に行いましたが、利用者の方が同じ作業を繰り返しながら、1つの作品に何年も時間を掛けたり、作りたいと考えたものをそのまま戸惑いもなく作品にしていたりする状況を目にしました。それはその利用者にとっては普通のことなのかもしれませんが、私にはできないことだと感じる事が多くありました。しかし、実習施設ではそこに着目し利用者の力を見いだしていました。私は、実習を通して、このような利用者の力の引き出し方があることに気づかされました。実習を行ったことによって、利用者のやりたいことを実現し、今をどのようにして幸せに生きるかということを考え、支援を行うことの大切さを学ぶことができました。

医療分野 田中弘子先生担当

病院での実習を通じて—実習で感じたこと

社会福祉学科3年1組9番 竹之内 優花

MSW(医療ソーシャルワーカー)はとても大変ですがやりがいのある職業だと感じました。なぜなら患者様のことを理解していくのはもちろん医療の機関で働くということは、医療用語などもある程度理解していくからです。また、他の介護施設などでは味わえない多くの多職種の方とのやり取りをするということやカンファレンス同行させて頂き感じたことなのですが、今医療の中でMSWは益々重要な存在になっていると感じました。家族と患者様の今後のことに関して意見を理解しているのはMSWで信頼感もありました。また情報共有の大切さに関しても学ぶことができました。一人の患者様を一人で見のではなく、数人の専門職の方と昨日や今日の様子や変わったこと、またリハビリ状況などたくさんの情報を交わしていたと思います。また、自分自身が知らなかった情報の入手や、担当不在時の対応のためにも、情報共有にはたくさんの意味があると感じました。

医療分野
田中弘子先生担当

病院での実習を振り返って思うこと

社会福祉学科4年7組13番 内村 香穂

今回の実習を通して、MSWという仕事について、自分なりに理解を深めることができた。患者様やご家族様を支援する過程で、IC (informed consent) に同席したり、情報共有を行うために回診や定期的な退院支援カンファレンスに参加したりしている現場も見ることができ、実習を通して、MSWが行う退院支援の仕事に付随している一つ一つの過程を知ることができた。また、支援を行うにあたり、多職種連携の大切さを痛感した。「多職種連携」「チーム医療」という言葉については、机上でも学んではいたが、実際に患者様、ご家族様のことを多職種で考え、同じ一つの目標に向かってアプローチしていく姿を目の当たりにし、これらの言葉の本当の意味を理解することができたように思う。

実習中に、MSWは医療と生活を繋ぐ架け橋のような存在だというお話を伺った。面談などを通して患者様やご家族様の思いを汲み取り、退院される患者様が希望する場所に進むことができるように、MSWとして何ができるのかを多角的な視点から考え、行動に移し、患者様とご家族様を次のステップへと送り出すことがMSWに求められているのではないかと感じた。MSWの仕事には難しさや奥深さ、ジレンマがたくさんあったが、だからこそそのやりがいや喜び、醍醐味があるということも身を持って学ぶことができた。

福祉事務所分野
大山朝子先生担当

鹿児島市福祉事務所でのソーシャルワーク実習を終えて

社会福祉学科3年3組3番 鎌田 真代

実習を通して、専門的知識を現場で経験し、自分自身の身に付けることができた貴重な1か月間であった。もちろん毎日の実習の中で目標を持ちながら疑問を持って実習に取り組むことができたのは、親のサポートや、周りのサポートがあつてこそのものである。そのような中で福祉の現場における理想と現実とのギャップ等、現場に身を置くことで体感でき、学べたものは大きいと思う。特に、生活保護における同行訪問での経験が印象に残っており、現場での支援の様子などを見せていただき、福祉の勉強に一層励みたいと思った。また、福祉事務所での実習プログラム（特に保育所・障害福祉課）は、来年度行う予定の教育実習についてとても参考になり、この実習を経験することにより、さらに自分の夢に対する思いも強まった。これからも一つひとつの経験を生かし前へ進んでいきたいと思う。

高齢者分野
中山慎吾先生担当

これから実習を迎える皆さんへ

中山 慎吾

利用者の方々とのコミュニケーションは、最初はみんな苦勞するけれど、思いがけず利用者の方から声を励まされるなど、実習生は楽しさやうれしさを味わっています。事例研究を行うのも大変ですが、各自頑張りました。

これから実習を迎える皆さん、平成 30 年度ソーシャルワーク実習学生報告会の配布資料にある、高齢者分野の報告者、小屋敷実友さん（社会福祉学科 3 年）のメッセージをお伝えします！

高齢者分野
石踊紳一郎先生担当

これから実習を迎える皆さんへ

社会福祉学科 3 年 1 組 8 番 小屋敷 実友

- ・実習先がどのような施設であるのか、どのようなことを大事にしているのかなどを踏まえて事前に調べ、事前訪問や事前協議会の時などにどのように実習を進めていくかを明確にすることで目標も立てやすくより良い実習になると思います。
- ・高齢者分野ではご利用者様だけでなくご家族との関わりも多くなるので言葉遣いや態度にも気を付けていくことが大事になってくると思います。
- ・慣れない実習で疲れることもあると思いますが食事や睡眠をしっかりとって有意義な実習にしてください。

社会福祉協議会分野
高橋信行先生担当

今年の実習を終えてー社会福祉協議会は地域福祉を推進する団体

高橋 信行

◇社会福祉協議会という存在

今年の実習で多くの学生が口にしたのが、「社会福祉協議会の実践活動の特質がよく理解できなかった」というものだった。実習担当教員としてはいささかショックであったが、多様な活動を行っている社会福祉協議会（以下「社協」）をひとくくりにすることができなかったようだ。それがまた社協ならではの特徴でもあるのだが、これらの反省を踏まえて、今後展開すべき事前学習にも工夫が必要であるとあらためて思った。

それにしても、社協のつかみどころのなさを直感した学生は、案外正しかったのかもしれない。まさに協議体として間接援助に関わる部分を中心に福祉に関わってきた社協が、在宅福祉推進の中でその担い手を求められた。介護保険導入時には、何割かの社協はつぶれるとまで言われた。個別援助から福祉計画の策定までをこなす「事業型」社協がモデルと言われた時代もあった。そして今また生活困窮者支援の一翼を担いつつあるが、そうした活動には手を引いた社協もある。介護保険サービスもしない、生活困窮もしない、そうした社協は一体何をしようとしているのだろうか。

◇最後の授業で社協への不満噴出

今年最後になった授業は、参加者は少なかったものの、まじめな討議を展開したのち、社協の実習指導に対する不満が噴出した。「十分な指導が受けられなかった」「社会福祉士の実習なのに、利用者との面接の場面が設定されていない」「担当者と十分な面談をする時間がない」そして、「きつい言葉を投げかけられた」など、もちろん実習体験そのものは、肯定しつつも、その中で本音が出たというところだったのだろう。それらには、「指導者も忙し

いから」で終わらせるわけにはいかないものもあった。

実習先確保は容易ではないが、実習先を精査する必要があるのかもしれない。確かに社協分野そのものを実習先から除外した大学もあるのが、それも適切とは言えないし、他分野にまかせるだけでソーシャルワーカー養成が十分出来るかという疑問もある。

◇実習で私は何をしてきたのか

もう何十年も社会福祉実習に関わりながら、そしてもうそろそろ定年を迎えるというのに、今一つ手応えがないことを恥じるべきだろうか。必ずしもあるべき実習の姿においついていない感があるのはどうしたことか。「実習体制そのものに内在する問題なのか」「事前・事後指導のあり方を含めて考える必要があるのか」「忙しすぎる現場の問題か」「学生の資質の問題なのか」そして「教員の指導のあり方の問題か」。

こんな私ではあるが、いくつか手応えを感じた指導もあった。

ある実習生を指導する中で、認知症と思われる高齢者の在宅ケア支援を行った時の話を聞いた。実習生の事例のまとめは素晴らしかったが、どのようにスーパーバイズをしていくのか、私にはあまり自信はなかった。通り一遍の指導でお茶を濁すことはできるかもしれない。しかし、この事例はもっと高められるはずだ。そう感じ、力のある現場の2人のソーシャルワーカーに参加してもらい、授業の中で、学生に事例報告をしてもらった。その日の授業は、いつにない盛り上がりを見せ、学生は積極的に事例に耳を傾け、そして発言した。2人のワーカーのコメントも見事であった。答えのない事例に向き合う姿勢は、これぞソーシャルワークの指導だと実感したのだった。

その後、2人のワーカーと反省会をしながら、「こんな授業をやりたいね」と話し合った。それが具体的になったのが、現在の「社会福祉特講Ⅲ」だ。初年度には、4年生になっていた先ほどの学生に再び出てきてもらい、この事例も検討材料とした。実習生は現在、ワーカーとして現場で活躍中だ。もっとも、これは助っ人あつての成功例なのだが。

人は失敗を繰り返しながら学び、その中で得た数少ない成功体験をよりどころにしながら生きていくのかもしれない。



精神保健福祉援助実習について

文責 岡田 洋一

本課程では、精神保健福祉援助実習とその関連科目である精神保健福祉援助実習指導Ⅰ～Ⅲ、精神保健福祉援助演習を連動させて、より深い気付きと学びが得られるような工夫を行っています。

年間スケジュールとしては、前期に精神保健福祉援助実習指導Ⅰで事前見学実習を行います。鹿児島市保健所ではスポ



ーツ交流会などに参加します。また、鹿児島市精神保健福祉交流センター（通称は一とぱーく）、鹿児島県精神保健福祉センターでは講義を、県立始良病院、谷山病院では見学を、地域活動支援センターひだまりでは当事者との交流を行い、学びを深めていきます。実習指導Ⅱでは事前指導と、事前協議会を実施して、実習指導者との協力関係を築いています。

夏季休業中に障害福祉サービス事業所8日間（64時間）と病院20日（160時間）、合計28日間（224時間）の実習を行います。今年度は履修者7名が、7か所の病院と、6か所の障害福祉サービス事業所で実習を行いました。実習中は毎週、巡回か帰校日指導（グループスーパービジョン）を行い、実習中に体験した様々な出来事をグループワークと個別面接を通して解釈し、人間的な学びの機会を得ながら自己覚知していきます。後期に入ると、実習指導Ⅲの中で、実習に関する学びを総括し、実習報告書を作成していきます。そのプロセスの中で、経験的な学びを理論的な学びに深めていくのです。その成果は、実習報告会で紹介されます。今年度の報告会には、実習指導者が25名参加しました（21名が鹿児島国際大学の出身者）。実習指導者は学生へ丁寧で貴重なフィードバックを行いました。学生はこの実習指導者からのフィードバックから大きな自信と安心感をもらうことが出来たのです。

また、実習を行うことを含めた現場でのソーシャルワーカーとしての動きや視点、価値と倫理を通年科目である精神保健福祉援助演習で学びます。前期は主に現場に行く前の学生ならではの視点で、後期は実習を行った上での現場を知った深い洞察を含めた視点で学んでいきます。様々な事例をグループワークやロールプレイを通して実践的に学び、学生同士のディスカッションを通してチームアプローチの在り方を理解することが出来るようになります。そして、病院実習を通し、次のように語っています。「様々な委員会やカンファレンス

に同席させていただき、どの場面でも各専門職がチームとして患者様に関わり、チームの中でそれぞれの役割が確立していると感じた。その中で、情報を共有することで支援を統一させ、それぞれの専門性を生かして支援の幅を広げていく必要性を学ぶことができた」。

学生は、実習を通して、精神科病院や障害福祉サービス事業所の現状を学び、そこに生活する生活者としての当事者とその家族の方々の想いや葛藤、人間的理解を深め、自己覚知していきます。そして、当事者の生活する環境としての精神科病院や事業所の在り方に気づいていくのです。当事者とその家族に関わる医療スタッフや事業所スタッフへどのような想いを持っているのか、スタッフは当事者とその家族へどのように関わっているのか、さらに、当事者と家族の間にはどのような背景と葛藤、想いがあるのかを見出すようにしていきます。

そのような状況の中で精神保健福祉士は当事者とその家族への関わり方、そして他職種のスタッフが精神保健福祉士に対してどのような理解をしているのかを学んでいきます。当事者と周りにいる家族やさらに彼らを支援している援助スタッフとの相互作用を見出すことが学生の課題となっているのです。最終的には学生自身の生き方について洞察し、自己覚知を図ることになります。

ある学生はこう語っています。「患者様を一人の生活者として見る視点が大切であると学んだ。私自身、この実習を迎えるまで精神障害者の方と関わったことがなく、知識や多少の理解はあっても、どこかで根拠の無い怖さや偏見を抱いていた。それは、精神症状が活発な時の病状や患者様が生きてこられた過去にばかり目が向いていたからだと思う。しかし、実際の関わりを通して患者様のパーソナリティを知り、多くのストレングスに気づくことができた。実習前に感じていた怖さや偏見を感じることなく実習を終えることが出来たのは、この視点が学べたからだと思う」。



介護実習

文責 岩崎 房子

介護福祉士課程の学生は、卒業までに3回の介護実習を経験します。介護実習は、1年次（春休み期間に10日間）、2年次（夏休み期間に22日間）、4年次（夏休み期間に25日間）ですので、卒業までにソーシャルワーク実習（3年次の夏休みに23日間）を含めると、80日間（16週間）の実習を経験することになります。介護実習では、現場での実践的な学びはもちろん、受け持ち利用者様を選定し介護過程を展開していきます。介護過程は、利用者様が望む「自分らしい生活」を実現させるために必要な思考過程のことを指します。利用者様の情報や希望を細かく分析することで介護ニーズを明確にし、それに基づいて介護プランを計画、実践することです。毎年、実習期間中の帰校日の後や日曜日にも登校して、苦勞しながら展開しています。今回は、介護実習Ⅱ（2年生）と介護実習Ⅲ（4年生）の介護過程の展開に関する2名の学生の感想を紹介します。

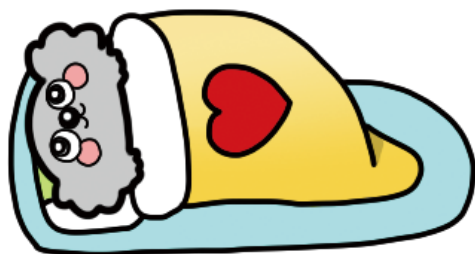
2年生：山方 志穂

実際に介護過程の展開を行いました。1年生の時の授業で課題事例をもとに介護過程を展開する難しさと、実際に担当利用者様を決めて介護過程を展開する難しさとは全く異なり、毎日会ってお話をする方なので、介護過程の展開の中でモヤモヤする場面がたくさんありました。しかし、介護過程の展開が終わってみるとスッキリとして、担当利用者様を今まで「認知症の方」ということしか重きに考えていなかったが、介護過程の展開をしていくうちに様々なことを考えるようになりました。どうしたら利用者様が話しておられたことが実現するかなど考えるようになったり、徐々に違った視点から見るができるようになっていきました。また、日々のコミュニケーションでも話題が広がりました。介護過程の展開をとおして、カルテからの情報も大事だと思いましたが、担当利用者様の意思を直接聞くことが大事だと思いました。また、一連の介護過程を展開するうえでは、担当利用者様の状態をよく観察し、何に困っておられて、どうなりたいかということを明確にすることも重要であるということ学ぶことができました。

4年生：平田 智之

全項目の介護過程を展開し、利用者様にどのようなニーズがあり、そのニーズに対してどのような支援を行う必要があるのかを知ることができました。今回は、看取りケアを行って

いる利用者様を担当し、介護過程を展開していきました。重度の認知症と、かなり高齢であることから意思疎通が困難であったため、情報収集はカルテを中心としました。カルテから収集できない情報は、職員の方や利用者様の家族から得ていきました。アセスメントは、利用者様から直接気持ちを引き出すことが困難であったため、自分から積極的に介助に関わらせていただくことで考察していきました。利用者様が現在抱えている課題は、誤嚥の危険性とワーファリン服薬による皮膚からの出血の可能性であると整理できました。誤嚥の危険性に関しては、食事介助で関わるができなかったため、安全な姿勢（ポジショニング）やギャジアップなどの環境整備を実施しました。皮膚からの出血の可能性に関しては、移乗や入浴介助の際に出血しないよう注意しながら介助を行うことができました。評価としては、誤嚥に関しては、食事の際にお茶や汁物を飲んだ時に時折むせ込みが見られたため、むせ込みの頻度によってはトロミを付けるなど食事形態を変えていく必要があるのではないか。また、皮膚からの出血に関しては、環境整備や介助時の皮膚の観察を行い、その都度対応していくと評価しました。今回、担当利用者様を通して、介護過程の一連の展開の流れを身をもって学ぶことができ、とても貴重な体験になりました。今回の担当利用者様は、重度の認知症があり、意思疎通が困難な方であったためコミュニケーションに戸惑う場面もありましたが、利用者様の気持ちを理解するには、どのように接するべきかと試行錯誤しながら関わっていくことで、利用者様の気持ちに寄り添った介助が微力ながら実践できたのではないかと思います。介護の基本である“利用者様らしい生活”を送っていただくために、利用者本位の介助をこれからはもっと意識していきたいと思っています。



教育実習

文責 古賀 政文

教職課程は、特別支援学校教諭、高等学校教諭（福祉、公民）、中学校教諭（社会）の教育職員養成を目的とする課程です。本学では、それぞれの免許状取得のために、5月から6月に掛けて中学校・高等学校での教育実習を、9月から10月に掛けて特別支援学校での教育実習を行います。

今年度教育実習を行った学生の感想等を紹介します。

中学校・高等学校

上川畑 さなえ

鹿児島城西高等学校 1年 社会福祉科 5月21日～6月1日

- ① 学んだこと・・・生徒は様々な家庭環境を持っているので、授業の内容でも、伝え方や言葉の遣い方に注意して話すことが大切だと学びました。
- ② 大変だったこと・・・2週間の実習の中で全校応援が2日間、忌日祭が1日あり、実質7日間の実習での教材研究や指導案作成が大変でした。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・実習では、授業以外に小テストの採点やアンケートのチェック等、様々なことを任せていただくことがあるので、自分自身のことは前もって終わらせて余裕を持っておくことが大切だと思います。

四元 沙枝

えびの市立飯野中学校 1年1組 5月21日～6月8日

- ① 学んだこと・・・授業だけではなく、学級の雰囲気づくりも含め学級経営も大切だと感じました。
- ② 大変だったこと・・・研究授業の内容がなかなか決まらなかったため、教材研究の時間があまり取れませんでした。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・早めに授業範囲を教えてもらって教材研究をたくさんしてください。学校では生徒と過ごす時間を大切に！

野元 愛美

霧島市立霧島中学校 1年A組 5月21日～6月9日

- ① 学んだこと・・・授業を構成していく中でICT機器の活用が難しく、時と場合によってきちんと使い分けるということを学びました。
- ② 大変だったこと・・・朝は早く、学校が終わってから部活動の指導をしての帰宅だったので、実習中の生活のリズムを整えることが大変でした。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・3週間長いようであつという間に過ぎていきます。緊張し

ていた時間がもったいないと感じると思います。後悔の無いように楽しんで頑張ってください。

京田 力也

鹿児島市立紫原中学校 2年3組 5月21日～6月9日

- ① 学んだこと・・・教師は生徒たちがより良い学校生活をおくることができるように、教師としての自覚を持って行動し、学校の環境づくりに取り組まなければいけないと学びました。
- ② 大変だったこと・・・授業を行うまでの、指導案の細案作りと教材研究が大変でした。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・指導案を作成していく中では、生徒たちの反応を予想しながら、授業の具体的なイメージを持ち、作成する必要があると思います。

西迫 優志

鹿児島市立和田中学校 3年5組 6月11日～6月22日

- ① 学んだこと・・・本時に対してどのように生徒に興味を持ってもらうか、山場をどこに作るかなど授業の組み立て方や、言葉遣い、立ち振る舞い。
- ② 大変だったこと・・・生活リズムを合わせること、教材研究、指導案作成。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・自前(大学の貸出でも可)のパソコンが必須になると思います。記録媒体に関してもセキュリティの問題があるので実習先の先生に対応してもらいましょう。また、生活リズムや体調を整えることがとても大切です。実習頑張ってください。

榎並 あゆみ

鹿児島市立東谷山中学校 1年6組 5月21日～6月8日

- ① 学んだこと・・・生徒指導は、予防的な指導や生徒の成長を促すことを目的として、授業中にも行われることが大きな学びでした。
- ② 大変だったこと・・・授業の準備に常に追われて余裕がないまま授業を行った時には、反省の多い授業になりました。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・授業開始前に生徒との何気ない会話でコミュニケーションを図ることで、授業中、生徒が発表しやすい雰囲気を作ることができると思います。

有川 響平

宮之城中学校 1年2組 5月21日～6月8日

- ① 学んだこと・・・授業中の発問を増やすことで生徒と対話が多くなり、より授業に興味をもってくれるようになったことがとても勉強になりました。
- ② 大変だったこと・・・担当学年の現在の進行具合を把握し、それに応じた指導案作成と教材研究が大変でした。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・3週間という短い期間の中で、担当の先生を初め、多くの先生方からアドバイスをいただき、また生徒から元気とやる気をもらい、充実した教

育実習を過ごすことができました。皆さんも自信をもってたくさん学んでください。

伊村 凌太

金久中学校 1年3組 9月3日～9月23日

- ① 学んだこと・・・生徒とのコミュニケーションや教師の連携など信頼関係が大切だと学びました。
- ② 大変だったこと・・・授業をする際の発問一つで生徒の活動を促すことができるため、工夫が必要だと思いました。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・この実習で多くの初めてを経験するため上手くいかないことやどうしていいかわからないことなどあると思いますが、わからないことは素直に聞くことが大切です。

片岡 康一

伊敷台中学校 2年5組 5月21日～6月9日

- ① 学んだこと・・・積極的に生徒に関わること、生徒に教えるだけでなく生徒から学ぶことの大切さを学びました。
- ② 大変だったこと・・・生徒により分かりやすく興味をもたせるような授業づくりを考え出すことができませんでした。担当の先生と授業内容を確認する時間をもっと確保しておくべきでした。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・失敗しても上手くいなくても当たり前と思ってポジティブに取り組んでほしいです。先生方からは、挨拶や授業観察の態度も見られています。立ち止まり笑顔で挨拶ができたなら満点です。授業参観の後感想を伝えるときは良いところを積極的に伝えると、相手も見せて良かったと思うようになるので、できるだけ良い点を見つけ褒めることが大切です。

竹内 玲美

坊津学園 7年1組 6月4日～6月22日

- ① 学んだこと・・・9学年が通う学校だったので、各学年の課程と各教科の課程と連携を図って、一貫性のある授業づくりを学校全体で行えるような教員間での連携を学びました。
- ② 大変だったこと・・・教材研究です。興味をもてる授業構成を考えながら、生徒にあった学びをどのように深めて広げていくか等、どの資料を提示していくかが難しかったです。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・自分が楽しんで授業をしたり、生徒と関わったりすることが一番だと思います。正直、私は社会科が苦手でしたが、実習を通して、面白さを見つけることができました。

堀之内 亮仁

樟南高等学校 工業科1年1組 5月28日～6月8日

- ① 学んだこと・・・現場の先生方が行っている授業に生徒を引き込む授業作りや授業外での生徒との関わりを学ぶことができました。
- ② 大変だったこと・・・生徒との関わり方です。高校生で年も近いこともあり、近すぎず遠すぎずの距離感が大変でした。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・実習期間は2週間で長いようであつという間です。1日を大切に充実した実習にしてください。授業は上手くしようとするのではなく第一に教師自身が楽しめる授業ができればいいと思います。

特別支援学校

上川畑 さなえ

串本野養護学校 高等部 3年3組 9月10日～9月21日

- ① 学んだこと・・・生徒に今教えていることが伝わるのは、今すぐかもしれないし10年後かもしれないけれど、生徒の力になると信じて伝えることが大切だと学びました。
- ② 大変だったこと・・・授業に一回しか入っていなかったクラスでの研究授業だったので、生徒の実態把握などが大変でした。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・事前訪問のときに前もって自分がする授業範囲を聞き、しっかり勉強して多くの伝え方を把握しておく、焦らず授業に臨めると思います。

四元 沙枝

都城きりしま支援学校 小林校

高等部2・3年2組（重複障害学級） 9月7日～9月21日

- ① 学んだこと・・・個人差の大きい集団において個人に合った学習量や教材・教具を準備することの大切さを学びました。
- ② 大変だったこと・・・指導案の書き方が細かく決められていて苦戦しました。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・たくさんの教師や児童生徒と関わって学びの多い実習にできるよう頑張ってください。

野元 愛美

武岡台養護学校 高等部 1年2組 9月3日～9月14日

- ① 学んだこと・・・生徒の実態把握の方法と個人に合った支援や授業構成の大切さを学びました。
- ② 大変だったこと・・・実態把握を踏まえた指導案作成と教材研究、教材集めが大変でした。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・待つのではなく自らコミュニケーションをとり、生徒とたくさん関わり楽しい実習にしてください。

京田 力也

武岡台養護学校 中学部 2年2組 9月3日～9月14日

- ① 学んだこと・・・授業を行う中では、ほかの先生方との連携が必要不可欠で、授業で

何を伝えたいのかを共有することの重要性を学んだ。

- ② 大変だったこと・・・評価授業までの指導案作成と教材研究が大変でした。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・評価授業までの時間が短いので、前もって計画をしっかりと立てて臨んだほうがいいと思います。

西迫 優志

桜丘養護学校 中学部 1年1組 9月7日～9月21日

- ① 学んだこと・・・生徒に対する接し方、かかわり方、実態把握や指導案作成。
- ② 大変だったこと・・・生徒とのかかわり方、信頼関係の形成、細案の作成と生徒の実態把握。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・自前(大学の貸出でも可)のパソコンが必須になると思います。記録媒体に関してもセキュリティの問題があるので実習先の先生に対応してもらいましょう。また、生活リズムや体調を整えることがとても大切です。生徒の実態に合わせた学校生活になると思います。根気強く頑張ってください。

榎並 あゆみ

桜丘養護学校 中学部 1年2組 9月7日～9月21日

- ① 学んだこと・・・言葉掛けの支援で、生徒の考えや行動が変わることを学びました。私の場合は、ほめることを中心に言葉掛けを行いました。
- ② 大変だったこと・・・評価授業の指導案作成に時間がかかり、多くの先生方を頼りながら完成させました。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・実習前に行事を見に行ったり、ボランティアをしたりして、子どもたちの様子を見ておくことも大切です。古賀先生や松元先生に積極的に相談してみてくださいね。

伊村 凌太

大島養護学校 中学部2年2組 9月27日～10月11日

- ① 学んだこと・・・指導案を作成する際に、その授業を行うことで生徒にどのような力を身に付けさせたいのかをイメージして授業を行うことが大切だと考えました。
- ② 大変だったこと・・・指導案作成、教材研究、授業を行う際に、導入、展開、まとめのメリハリをつけるのが難しかったです。
- ③ 後輩へのアドバイス・・・積極的に生徒と関わりその時間を大切にしてください。分からないことは先生方に積極的に質問し、多くのことを学べる有意義な実習にしてください。

片岡 康一

皆与志養護学校 小学部 1組 10月29日～11月9日

- ① 学んだこと・・・感覚運動の指導方法やコミュニケーションの取り方を学びました。児童のできることをどのようにして増やすか、どのように自立へとつなげていくかを

考えました。

- ② **大変だったこと**・・・児童の言葉をくみ取れずにいました。どのような指導方法があり、どんな歌が興味をもたせられるか等、迷ってしまうこともありました。
- ③ **後輩へのアドバイス**・・・児童との関わりでは自信をもって取り組むことが大切だと思います。実態把握をする上で勉強することはたくさんありますが、先生に積極的に質問することが大切だと思います。

竹内 玲美

鹿児島養護学校 高等部 10組 9月7日～9月21日

- ① **学んだこと**・・・限られた時間（在学時間）の中で、一人一人の生徒にとって、少しでも多くの経験や成長へ繋げられる指導・支援の方法を、学校全体で連携し、考え、実践することの大切さを学びました。
- ② **大変だったこと**・・・一人一人の実態を踏まえた、細かい指導案作成が大変でした。学校の生活を通して、先生方の役割と立ち位置等、周りをよく見ながら自分はどうか行動していくか考えることも大事になってきます。
- ③ **後輩へのアドバイス**・・・自分から関わりをもとうとする生徒は少ないので、私たちから積極的にアプローチしていくことが生徒との距離感も上手く図れるようになると思います。きっと楽しく充実した実習になると思います。

堀之内 亮仁

串木野養護学校 中学部1年3組 9月10日～9月21日

- ① **学んだこと**・・・生徒と関わるための引き出しの多さを学びました。現場の先生方は生徒と関わる際に細かいところに目を向けて、どんな些細なことでも話題にしてクラスの雰囲気作りをされていました。また、先生方同士の密な連携も見ることによって学ぶことができました。
- ② **大変だったこと**・・・授業作りの工夫や導入からまとめまでの授業展開を関連させながら進めるのが難しかったです。
- ③ **後輩へのアドバイス**・・・実習に行く前から指導案の作成は難しいと思いますが、大学での勉強は実習で役に立つものばかりなので、今日から実習にむけて一つ一つの講義を自分のものにできるように頑張ってください。



新入生ゼミⅡ「福祉施設見学研修」について

今年度も、昨年度、一昨年度に続き、COC（Center of Community:「地（知）の拠点事業」）の一環として、「新入生ゼミナールⅡ」の授業のなかで「福祉施設見学研修」を実施しました。

昨年度と同様に、社会福祉学科1年生が二つのグループに分かれ、社会福祉法人喜入会と社会福祉法人敬和会の施設をそれぞれ訪問し、見学と研修を行いました（1, 2組は敬和会を、3, 4, 5組は喜入会を訪問）。

以下は、参加した学生の皆さんの感想や意見をクラスごとにまとめたものです。

1組 竹ノ内 優作

新入生ゼミナールの福祉施設見学研修として、福祉複合施設「知覧育成園」へ行きました。4つの福祉施設をクラスごとで順番に見学しました。最初に「サポートセンター・トレフル」に行きました。そこは未就学児、就学児、18歳以上の障害のある方々を対象に利用することができる施設で、利用者のことを考えて工夫されている家具がたくさんありました。次に「特別養護老人ホームちらん敬和の郷」に行きました。そこでは入居以外にもショートステイという短期間だけ住むことができるコースもありました。また設備も充実しており、座ったまま入浴することのできるお風呂や、普通よりも広い空間のあるエレベーターなどとても居心地のいい施設になっていて感動しました。最後に「障害者就労支援センターみらい」に行きました。働く意欲のある障害を持つ方々に就労の場を提供していて、主にしいたけを栽培していました。労働時間も約6時間とちょうどよく、いい施設だと思いました。とても充実した時間を過ごすことが出来ました。

1組 山口 龍也

今回は、老人ホームや障害者支援センターなど様々な施設を見学し、いろいろなことを学ぶことができました。私は施設の内容よりは施設にある「道具」や「モノ」に着目して見学しました。全体を通して、風呂場に気を付けて設計していた気がします。椅子のまま入れる風呂や、泡の出る風呂、また風呂場に山の絵を飾っていたりしました。だれでも普段生活をしている中で「お風呂」が一番落ち着ける空間だと思います。お風呂が嫌いな人がなるべく楽しく、また入りたいなと思わせるような工夫がされていたのでとても凄いなと思いました。また、「る・トレフル」では、部屋と部屋を行き来できる穴を作っていたりロフトを作っていたりと、楽しんでもらえるように様々な工夫がされていました。木をメインにされている作りはとてもいいと思いました。質疑応答の時間に消極的になり手を挙げて質問することができませんでした。これからも施設見学などは度々あると思いますので、自分の意見をきちんとと言えるようにしていきたいです。このたびは様々な施設を訪問させていただきありがとうございました。

2組 井上 諒

「障害者自立支援センターけいわ」で働く人たちは椎茸の栽培や加工、鯉節の袋詰めといった仕事を行っていた。黙々と自分の仕事をこなしている、見る限り健常者と何も変わらない光景は私が思っていたイメージとはかなり違っていた。別の工場ではパニックを起こす人、数を数えられない人も働いているとのことだった。実際に働いている様子を見ることはできなかったが、マス目のついた板を使ったり、パニックを落ち着かせるためのスペースが用意されていたり、障害が重い人でも働ける工夫を援助する側が用意していた。

高齢者が利用している特別養護老人ホームは、段差のない造りや、災害時に緩衝剤として利用できるベッドマットなど、施設そのものが利用者のことを考えて造られていて、自分が家族を預けるとしても安心できると感じた。児童養護施設は木材が多く使われていて、大きな窓から光が入っていたので、他の施設よりも温かみがあった。

2組 肥後 有希

活動計画通りに行えない部分もあったが、障害者分野だけでなく児童、高齢者の施設など様々な分野の施設を回ったことで、興味関心のある分野以外も見ることができ全体的に視野が広がったのではないかなと思う。

特に「サポートセンター・トレフル」では子どもたちが幼稚園、保育園、学校または自宅から通いやすい場所にあり、保護者の皆さんも通わせやすいのではないかなと感じた。施設自体も木をたくさん使い、庭付きでのびのびと遊ぶ環境を確保できるのが非常に療育の面でも大きく関係するということを聞き、非常に印象に残っている。

障害者分野の見学では、就労支援施設の見学を行い、会社で働く人たちと同じように働き、給料をもらう A 型と自分のペースで働いて給料をもらえる B 型とあるが、利用者の障害の程度に合わせた仕事量や内容で業務を行ったり、また衛生管理の徹底や協同で作業を行ったりと利用者の状態に合わせて、働きやすい環境を作っており丁寧な対応がカギとなることを知った。

「ちらん敬和の郷」では、一人一部屋、トイレ、ベッド、洗面台完備でプライバシーに考慮した作りになっていて、暮らしやすさを感じた。防災もしっかりしており、マットレスやベランダ、部屋全体に工夫を凝らし、様々な災害に備えることで、入所者の命と安全を考え、ご家族も安心して預けることができていると思う。



3組 上園 菜月

同じグループの施設でも、施設ごとに特色があった。症状の具合によって分けられているため、その具合ごとに対応したサービスが行われていた。どの施設にも眠りスキャンやお風呂など、最新の設備が備わっていて驚いた。お風呂は、利用者の方々が恥ずかしくないように配慮された造りになっていた。最新のリハビリテーション機器を使用されており、高齢者のことを考えたものになっていた。また、施設に居た利用者の方々は、皆さんとても楽しそうで、特に、最初に見学した「ディサービスリハビリテーション瀬々串」は、施設全体の雰囲気明るく印象的だった。このような明るい雰囲気や利用者の方のことを考えた最新の設備のおかげで、利用者の方々は心地よく生活できるのだろうと思った。

3組 寺田 麻紘

今回4つの施設見学をした。どの施設もそれぞれ特色があり興味深かった。パワーリハビリテーションは、一見、筋力強化にも見えるが、実際は動作性や体力の改善を目標にしているということに驚いた。認知症予防としては、写真を観たり、ミッケルアートを用いて、その絵に関連する利用者自身の思い出を話したり、思い出したりすることで、認知症の周辺症状を改善することができるというケアの方法を取り入れられていた。実際に回想法を行っている様子を観ることができた。皆さん楽しそうにお話されていた。ディサービスやディケアで行われているサービスは、とても独特かつ新しいものばかりで、時代とともに、介護のあり方も変化していることを実感した。

4組 草宮 綾平

このフィールドワーク活動を行うことで、地域に貢献したり役に立てるような仕事をしたいと思いました。まだ、どの職に就くかははっきりとは決まっていませんが、どの職についても、地元鹿児島で頑張っていけたらいいなと思います。また、地域との連携がとても大切だということも分かりました。

4組 平 聖士郎

ミッケルアート、コグニサイズ、眠りスキャンの3つの内容を主に深く知ることができました。また、実際に利用者の方々と触れ合うことでより介護の必要性や大変さややりがいなどを近くで感じることもできたと思います。今後に生かし、福祉についてさらに学びを深めようと思える良い機会になったと思いました。

5組 竹宮 千智

「ニコニコタウンきいれ」はいろんな種類の施設が喜入という一つの地域に密集していた。その理由は、もしも要介護認定のレベルが変わったり、施設に入る目的が変わったりしたときに、住み慣れた土地で施設を移動できるようにするためということだった。利用者の気持ちを考え寄り添うという施設側の心配りが施設を建設するときからあったと思った。また、眠りSCANという機器はすごいと思った。薄いシート状のものが利用者のケガ防止や睡眠

効率を向上させるためだけでなく、急変のリスクを軽減するということを知って、何気ない日常の動作にも目を光らせることがより良い支援につながると感じた。そして、施設での活動で他施設が行っている「生きがいつくり」という折り紙やカレンダーづくりはしていないということに驚いた。その代わりに、パワーリハビリやデュアルタスクといった運動を行っていた。筋力の低下を抑えたり、脳を活性化させることが目的であった。「ゆっくりと回数を多く」ということが大切であるということであった。一つだけ私も体験させていただいた。重さはとても軽いため持ち上げることは容易であった。だけど、ゆっくりするということ自体はとても難しかった。これを毎日繰り返して行うことで普段あまり使わない筋肉が使われて、より長く自分の力で歩いたり立ったりすることができると感じた。

「ニコニコタウンきいれ」を半日見学して、利用者のことをよく考えている施設であると思った。睡眠や運動など日常動作にも配慮することが大切だと知った。一人一人に適した支援を行うためにはこうした細かい気配りが必要になることがよく理解できた。

5組 宮原 七海

今回、「にこにこタウンきいれ」の施設を見学させていただいた。「にこにこタウンきいれ」は、病院から特別養護老人ホームや介護老人保健施設まで、高齢者福祉に幅広い支援を行っている事業所だった。事前学習でも学んではいたが、実際に現場へ行ってみると、身をもって詳しく学ぶことができた。私は、介護福祉士課程で現在勉強をしているが、実際に高齢者施設を訪れたのは初めてだった。学校で習った介護の知識はもちろん、お風呂などの技術も学んでいたもので、実際に活用されていることにとても関心を持った。利用者の方々は皆、とても笑顔が素敵で、おやつを食べたり、習字をしたり、ほかの利用者や介護士の方とおしゃべりをしたり、なかには元気よく運動をしている方もいた。どの利用者も笑顔が素敵で、施設で送る日々を楽しんでいらっしゃる様子だった。介護老人保健施設と特別養護老人ホームは隣接していて、利用者の状態によってすぐに移動ができ、かつ施設からの景色をあえてあまり変えないことによって利用者のストレスを軽減させるなど、利用者が快適な生活を送ることができるように工夫がなされていた。



今年度の卒論発表会は、2018年12月7日（金）の午後1時から、大学内の二号館の2室（225教室と235教室）で開催された。各教室、3名ずつの発表があり、あわせて6名が演習論文の内容を発表し、質疑応答が行われた。

それぞれの教室における発表内容について、以下、高橋と村上がそれぞれコメントする。

卒論発表会（225教室）

高橋 信行

この教室では3つのゼミ論報告があった。東知可子さん（岡田ゼミ）、上村元稀さん（大山ゼミ）、小原朋之さん（高橋ゼミ）である。

「身近な人の死がもたらした喪失体験によるPTSD・そして回復援助の在り方」 東 知可子

報告では、ゼミ論文全体の第1章 ト라우マとは（1節トラウマの歴史、2節トラウマの体験とPTSD、3節PTSDについて）、第2章 日本におけるトラウマとその支援、第3章自分自身の喪失体験（報告からは削除）、第4章 これからの回復援助の在り方。論文の種類とすれば、文献研究にあたるだろう。資料の考察では、「トラウマの歴史から、性被害の体験記、日本の震災、自分の喪失体験、そして回復援助の在り方を学んできた。心を痛めるのは、人の影響が大きい、回復もまた自身の喪失体験を乗り越えるための作業であったのではないかと推察する。そしてそれが他者への支援、専門職としての志向性につながっている。

自分自身のつらい体験が専門職へ向かう動機になっていることがしばしばある。しかし、そうした動機は、クライアントとワーカーとの同一視をうむと戒める者もいた。ジゼラ・コノプカは、「感情移入」(Empathy) についての説明の中で次のように述べている。「社会福祉の分野では、かつて、幸せな家庭環境をもつ学生だけが社会福祉の学校に入学を許可されるべきだと喧伝されたことがある。なかには非常に極端な発言をし、個人的な深刻な不幸の体験—身体的、情緒的、社会的いずれであっても—を動機に入学を望む者に対しては、その動機が神経症的同一視を案じるかもしれないというおそれのあまり、入学許可を与えるべきではないという者まであったのである。これはもとよりまったく愚にもつかぬ考えである。過去の経験を神経症的に利用する危険はたしかにあるが、これは幸福な経験についてもあてはまることである。実際にはあまりにも底の浅いみちたりた生活からは普通、よいソーシャルワーカーはうまれてこないものである」（前田ケイ訳 p.122 全国社会福祉協議会 1967）と。

「障害者スポーツの歴史的展開」 上村 元稀

上村君は、このテーマを選んだ動機について「オリンピックでメダルを獲得した人の名前は言えても、パラリンピックでメダルを獲得した人の名前は言えないという人が多い」という点をあげている。不平等性への憤りや社会正義が動機になっているように、論文は、第1

章日本における障害者スポーツ（第1節日本における障害者スポーツの歴史、第2節日本における障害者スポーツ指導者制度）、第2章ヨーロッパにおける障害者スポーツ（第1節ヨーロッパにおける障害者のスポーツ組織、第2節一般スポーツ組織との関係性、第3節障害者スポーツの発祥の国ドイツ）第3章今後の日本における障害者スポーツの発展に向けて（第1節障害者スポーツ指導者制度、第2節選手を取り巻く環境、第3節障害者スポーツとノーマライゼーション）、おわりにという構成になっている。

論文の論理構成から言えば、日本における障害者スポーツの歴史をおいながら、そこでの問題点をあげ、ヨーロッパ（特にドイツでの制度・環境）の障害者スポーツを先進地での施策として取り上げ、そうした点から、日本の障害者スポーツのあるべき点を論じている。

後半のノーマライゼーションとの関連では、障害者と関わりを持つことのない人々が障害者スポーツを観戦し、選手の「できること」へ視線を向けることでノーマライゼーションについて、さらに理解を深めることができると思うと結んでいる。ノーマライゼーションから「インテグレーション」への展開が見られる。しかし、このインテグレーションは、観客＝健常者、競技＝障害者という構図の中のインテグレーションである。「おわりに」で書いていたように、スポーツはある意味、「できない」を楽しむものだ。現在、さまざまな障害に対応したスポーツの開発とともに、障害者と健常者が共に選手となり競技できるスポーツの開発も進められている。

蛇足であるが、こうした障害者スポーツと表裏の関係にも見える、障害者が感動の対象になっている点の否定的な側面を問題にした「感動ポルノ」という視点をどのように思われるだろうか。NHKの「バリバラ」では、こうした視点から感動を演出する民放の放送を批判していた。

「獅子島の地域福祉について」 小原 朋之

「獅子島の地域福祉について」では、1. 獅子島の特性（地域の概要、交通の現状、産業の現況と課題、就業の現況と課題、医療の確保等の現況と課題、介護サービスの確保等の現況と課題、小規模多機能の誕生と閉鎖）、2. 獅子島アンケート調査－特に医療体制についての結果を中心に、3. 獅子島のこれから－マインドマップを使った獅子島の課題の3章構成である。

第1章は、既存文献と長島町地域離島振興計画書からの引用が主である。第2章のアンケート調査は、社会調査実習履修者と大学院プロジェクト研究の大学院生とともに、参加した面接調査や調査票を使った留置調査の結果の一部を紹介したものである。獅子島は700名程度の人が住む島であり、長島町に属するものの、昔から集落によっては、水俣市や天草市との交流が深く、それが利用する医療機関に如実に出ている。こうしたデータを受けて、マインドマップを使って獅子島の課題や地域福祉の推進方法を考えたのが第3章である。

これらの項目のもとに、様々なアイデアがちりばめられている。①情報収集、②大学が継続してプロジェクトをたちあげる、③住民のリーダーを外に出して学んでもらう、④地元の高校と連携して展望を考える、⑤大学よかアイデアコンテストにだしてみる、⑥観光と福祉を結ぶ、⑦獅子島住民の思いを冊子にして配布する、⑧他の社会福祉法人に獅子島のことを知ってもらう、⑨インターネットは活用できないか、⑩情報提供⑪行政、⑫長島町の企業が協力する。

今後は、これらのアイデアを一定の基準から吟味していく必要があるが、論文ではそこまで行っていない。また残念だったのは、これぞオリジナルという「最後に」のところが時間の関係からか、発表できずに、「読んでおいてください」で終わったことだ。時間超過しても、このところは話してほしかった。

卒論発表会（235教室）

村上 光朗

235 教室では、上川畑さなえさん（松元ゼミ）、川崎愛子さん、出口篤君（ともに蓑毛ゼミ）の三名の発表があった。

上川畑さんの演習題目は、「自閉症児の療育や特別支援教育の効果について一日常支援を行う人の意識調査に視点を当てて一」であり、自閉症児の療育や教育に関与している主セクターである「療育施設」スタッフと「特別支援学校」の教員へのアンケート結果をもとにした報告が行われた。「療育施設」においては、主として専門スタッフによる「療育」が行われている。療育とは、「治療」と「教育」を合わせた言葉で、障がいのある乳児や児童の社会的自立を目的として行われる取組のことをさしている。これに対して、「特別支援教育」は、幼児・児童・生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、社会生活や学習上の困難を改善・克服するために、適切な指導や支援、教育活動を行っている。代表的なものは「特別支援学校」であるが、その他にも、「特別支援学級」や通級指導などがある。

上川畑さんは、「療育施設」のスタッフと「特別支援学校」の教員へのアンケート結果を比較分析することで、次のような点を発見・考察している。療育施設での「療育効果」が、主として自閉症の本質的症状を改善する点（例えば、「他人に興味をもつようになった」とか、「視線が合わせられるようになった」とか）についての効果項目に集中しがちなのに対して、特別支援学校での教育効果は、生活上の困難に対する効果項目の改善に集中している点である。たとえば、日常生活動作（ADL:Activities of Daily Living）が身に着いたとか、「指示が通るようになった」などといった項目である。それぞれの施設の目的・特性がアンケートの結果に反映していると考えてよいだろう。また、効果があると実感している人の割合は、3年以上勤務している人の割合が高いという結果も導き出されている。

次に、川崎愛子さんは、「障害者の人権と合理的配慮に関する一考察—障害者権利条約が国内法に与えた影響」というテーマについて考察し、発表を行った。「障害者権利条約」とは、障害者自身の自決権を最大限に考慮し、障害者の文脈からこれまでの人権概念を再定義したものである。この条約の一番の特色は、「障害のある人間とない人間とが平等に振る舞えるための合理的配慮かつ個別的な支援」の必要性を強調していることである。わが国では、2014年にこの条約がようやく批准されたものの、「合理的配慮」についての具体的な定義がなされていないことが問題視されている。障害者と健常者とが、平等な存在として向き合うためには、まずは「存在」自体への互いの畏敬の念が必要であるとともに、障害者の立場に沿った個別的支援や合理的配慮が具現化されなければならないが、残念なことにいまだそれが実現されていない。川崎さんは、この点をこれまでの障害者をめぐるさまざまな立法を

踏まえることで、その弱点について明らかにしている。

最後に、出口篤君は、自身が聴覚障害をもつことを踏まえて、①聴覚障害者に対して健聴者が気づきにくく誤解しやすい点、②聴覚障害者側のコミュニケーション上の問題点、③コミュニケーションの方法（とくに職場における聴覚障害者への情報提供の方法）について考察を行っている。演習論文のテーマは、「聴覚障がい者としての社会人の現状」である。研究方法は、文献研究（インターネット検索も含む）と、実際に企業で働く聴覚障がい者に対する聞き取り調査であった。

その結果、健聴者側からは、見た目だけでは聴覚障がいの特性がわからず、障がいに気づかずに心無い言葉をかけるということがある反面、聴覚障がい者の側も、健聴者に自分の願望をはっきりと伝えることに遠慮があり、分からなくとも頷いてしまう癖が身についてしまいがちであるという点が指摘されている。また、コミュニケーションの方法としては、「筆談」が最も多く、有効な手段である点が考察されている。



2018年度演習論文テーマ

猪飼ゼミ

氏 名	論文題目
野田 京佑	フリーターについて

岩崎ゼミ

氏 名	論文題目
川原田 優華	ゆるきゃらと地域創生
末古 千奈津	池之原と3つの問題
臼崎 美沙	認知症の視点
櫻井 大樹	認知症高齢者とのコミュニケーション
中藺 瑛璃沙	アニマルセラピーについて
中村 美鈴	犯罪者になった障害者 ～二重の苦を背負った人の生き方～ 医療観察法についての研究
濱口 隆弘	結核について
西 祐佳	合唱 ～なぜ、男声の合唱離れが進んだのか～

大山ゼミ

氏 名	論文題目
今西 奈々美	動物の殺処分について
馬場 光希	出生前診断について
鳥居 梨奈	認知症の高齢者に対する支援について
森重 翔汰	タバコがもたらす影響－禁煙するためには－
大田 摩琴	L G B Tについて

川崎 浩一	盲導犬領域における盲導犬ロボットの可能性について
中村 楓	色の効果や特徴について -心や体への影響について-
植村 元稀	障害者スポーツの歴史的展開について
中島 里菜	障がいを持っている人のアート -創作活動の視点から-
宮田 竜成	福祉車両について
内村 香穂	医療ソーシャルワークについて -現状と課題-

岡田ゼミ

氏 名	論文題目
高野 志織	ADHD とその家族への支援 -ADHD とその家族が共によりよく生きていくための課題-
井上 清香	発達障害者の就労の現状と課題
坂元 久志	人はなぜ異世界を求めるのか
東 知可子	身近な人の死がもたらした喪失体験 による PTSD、そして回復援助の在り方

佐野ゼミ

氏 名	論文題目
神田 宙音	人口減少と地域活性化策
尾辻 亘	福祉における AI と IoT の活用

高橋ゼミ

氏 名	論文題目
城崎 珠愛瑠	地域共生社会とこれからの社会福祉
大和矢 隆太	高齢社会と地域の在り方-鹿児島市大明丘調査からの考察-
小原 朋之	獅子島の地域福祉について

中山ゼミ

氏 名	論文題目
原田 歩美	働くということ～障害者の就労について～
西 星哉	コーヒーについて
大久保 杏香	聴導犬について
吉田 美南海	ソーシャルサポートのモデルと効果
弓場 悠太	運動と健康維持

松元ゼミ

氏 名	論文題目
西迫 優志	安楽死と尊厳死
榎並 あゆみ	AAC を活用したコミュニケーション支援
野元 愛美	吃音について
京田 力也	音楽療法と学校教育について
四元 沙枝	自閉症とその支援体制について
上川畑 さなえ	自閉症児の療育と特別支援教育の効果について ～日常支援を行う人の意識調査に視点を当てて～

養毛ゼミ

氏 名	論文題目
川崎 愛子	障害者の人権と合理的配慮に関する一考察 —障害者権利条約が国内法に与えた影響—
高橋 海司	児童養護施設職員の退職率の実態と解析
道添 歌織	知的障害児（者）の親や家族への支援に関する一考察
（共同執筆） 有川 響平、谷口 雅尚、相澤 里帆、 伊村 凌太、新留 裕貴、竹内 玲美、 堀之内 亮仁、出口 篤、片岡 康一、 富森 紳太郎	聴覚障害教育（ろう学校）について（共同研究）

村上ゼミ

氏 名	論文題目
柿本 真輝	コンシューマーゲームにおける概要と人間と社会に及ぼす影響
久木田 直人	e スポーツの普及における可能性と課題
前園 飛鳥	仮面ライダーの過去と現在と未来



鹿児島国際大学社会福祉学会会則

【総 則】

第1条 本会は、鹿児島国際大学社会福祉学会と称し、本会の事務所を鹿児島国際大学福祉社会学部社会福祉学科に置く。

第2条 本会は、学術研究を推進し、会員相互の学問的交流を促進するとともに、地域社会の文化的発展に寄与することを目的とする。

第3条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。
(ア) 会報ならびに機関紙の編集・発行
(イ) 研究会・講演会等の開催
(ウ) その他、本会の目的を達成するために必要と認められる事業

【組 織】

第4条 1. 本会は、福祉社会学部社会福祉学科並びに大学院福祉社会学研究科に在籍する学生および両科の専任教員をもって会員とする。
2. 準会員については、別に定める。

第5条 1. 本会に次の機関を置く。
(1) 会長
(2) 総会
(3) 運営委員会
(4) 監査委員
2. 会長は、社会福祉学科長とする。
3. 運営委員(教員4名、学生8名以上)および監査委員(教員2名、学生2名)は、社会福祉学科で選出し、総会の承認を得るものとする。
4. 前項の各位委員の任期は、教員については2年、学生委員については1年とする。
ただし、再任は妨げないものとする。

【機 関】

第6条 1. 会長は、本会を代表する。
2. 会長は、年1回の定期総会を招集しなければならない。
3. 会長は、運営委員会の議決に基づいて臨時総会を招集することができる。

第7条 総会は、本会の最高議決機関である。

第8条 1. 運営委員会は、総会の承認により、学会の運営にあたる。
2. 運営委員会は、委員長(教員)と副委員長(学生)の各1名を互選する。
(1) 運営委員長は、運営委員会を代表し、定期および臨時に運営委員会を招集する。
(2) 運営委員会は、そのもとに必要に応じて委員会を置くことができる。
3. 運営委員会は、教員委員および学生委員のそれぞれ過半数の出席をによって成立する。

4. 運営委員会は、次の事項を審議決定しなければならない。

- (1) 年間事業計画
- (2) 予算案および決算書
- (3) 会則の改正ならびに諸規定承認・改廃
- (4) その他必要な事項

5. 運営委員会の議決は、出席した教員委員および学生委員のそれぞれの過半数の賛成で決する

[財 政]

第9条 教員会員の会費は、年額2,500円とし、年度初めに納入する。学生会員の会費は、年額2,500円とし、入学時に一括納入する。

第10条 1. 本会の経費は、会費・補助金・寄付金でまかなう。
2. 会計年度は、4月1日から翌年3月31日までとする。

第11条 会費の徴収、保管および支払いについては、大学事務局に委任するものとする。

第12条 運営委員会は、毎年会計年度終了後2ヶ月以内に決算を行い、監査委員の監査を受けたいで総会に報告し、その承認を得なければならない。

[改廃手続]

第13条 本会則の改廃は、運営委員が発議し、総会の決議を経なければならない。

附則

- 1. この会則は、昭和57年4月1日から施行する。
- 2. この会則は、平成13年7月27日に改正し、施行する。
- 3. この会則は、平成15年7月4日に改正し、施行する。
- 4. この会則は、平成18年4月1日に改正し、施行する。
- 5. この会則は、平成20年4月1日に改正し、施行する。

2017(平成29)年度 鹿児島国際大学 社会福祉学会 収支決算報告

収入の部

項 目		決 算	予 算
前年度繰越金		2,935,839	2,935,839
会 費	897,500	908,029	787,500
参加費	0		
雑収入	10,529		
収 入 計	908,029	3,843,868	3,723,339

支出の部

項 目		決 算	予 算
「演習論文要旨集」発行費	264,600	1,246,374	300,000
会 議 費	1,420		0
自主研究助成費	9,900		300,000
新入生歓迎行事費	260,000		260,000
卒業パーティー開催費	280,000		260,000
「ゆうかり」発行費	334,800		300,000
講演会開催費	72,656		150,000
事 務 費	0		10,000
通 信 費	2,998		10,000
特別事業費	0		0
学生アルバイト料	0		0
会 費	20,000		50,000
支 出 計	1,246,374		1,640,000
当年度末残高		2,597,494	…①
収 入	平成 30 年度会費 787,500	782,500	…②
通帳残高 (① + ②)		3,379,994 円	

ゆうかり編集室便り



- ◆編集は初めての体験だったので、とにかく大変でした。もっとオリジナル記事を掲載したかったのですが、時間不足でした。来年度の『ゆうかり』(第19号)に期待してください。それから編集や取材に興味のある方、是非、編集委員に立候補してくださいね。運営委員でなくても誰でも参加できます。いつでも編集会議に参加してください。おやつも用意して待っています。(村上光朗：写真後列左)
- ◆入学してすぐ、社会福祉学会の委員・係り決めがあり、何をするのか詳しく知らぬまま本誌『ゆうかり』の編集に参加させていただきました。猫について先輩に話を聞かせていただいたり、表紙の写真を撮ったり、とても楽しかったです。(佐々木晶：写真前列右)
- ◆初めて編集委員とやらになってみました。いい経験になったと思います。私は猫の記事を書きましたが、書こうと決めたときは、取材したり、写真を撮ったり、こんなに忙しくなるとは思っていませんでした。でも得難い経験だったと思います。ありがとうございました！(有園菜央：写真前列左)
- ◆卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。これからのご活躍をお祈りしています。今年度からは表紙を変えてみたり、社会福祉学科の新たなイベント「一日大学生体験」や大学に住みついている猫の話などを取り入れてみました！また私は、この「ゆうかり編集部」を通して、チームの仲間、村上先生と楽しい日々を過ごせたと感じています。(上村義歩：写真後列右)
- ☞「ゆうかり」ロゴ、「ポポラス」イラスト作成に関しては、東絢音さん、村上瑤子さんにご協力いただきました。ありがとうございました。

編集後記

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。そして、この『ゆうかり』をいま手にとってくださっている新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。

卒業生の皆様には、社会福祉学科・福祉社会学研究科を修了され、いよいよ新たな世界へと羽ばたいてゆかれます。どうかご自愛くださり、志しを遂げられることを祈念させていただきます。

そして、新たに社会福祉学科・福祉社会学研究科に入学されたフレッシュな皆様、これからの大学・大学院生活が、皆様にとって実り多い自己変革の時間となりますことを期待しております。

2018年度は、『ゆうかり』編集委員による特別企画として、「大学猫」を特集しました。

今の時代、「寛容さ」と「自由」が世界から次第に失われつつあります。大きな政治の動きでは、トランプ政権に代表される不寛容政策が、そして日常のレベルでは、ロード・レイジや児童虐待、ネット炎上にみられるようなストレスフルな他者攻撃が、次第次第に人々の自由な発言や行動に対して目に見えない抑圧をかけています。

その点、猫たちはどうでしょう。彼らの行くところ、障害物などありません。冬の寒い日には土管のなかで過ごす逞しさもあります。侵入した建物からつまみだされてもくじけることはありません、いつの間にか監視の目を掻い潜って、潜り込みに成功して澄まし顔です。ただし、「大学猫」といっても、彼らは大学だけに留まっているわけではありません。その生態は謎だらけです。

猫に不寛容な社会は、案外と人間に対しても不寛容かもしれません。もしもそうだとすると、「大学猫」への私たち大学人の接し方は、その大学自体の社会的寛容さのひとつのバロメーターとなるのかもしれませんがね。大学内で猫たちを見かけたら、今回の記事の事を少しだけ思い出していただけると幸いです。

2018(平成30)年度 鹿児島国際大学社会福祉学会 運営委員

教員運営委員 高橋信行 上田雪子 古賀政文 村上光朗

学生運営委員

1年：山元結花 森博斗 脇絵里香 元莉奈 佐々木晶 福家浩太 平聖士郎
有園菜央 中谷華恋

3年：竹下綾乃 宇藤いちず 柏木洋人 加藤七海 上杉裕太 牧大貴 濱崎直人
管屋達樹 内大久保浩介 古宮大樹 神野志織 鎌田真代 上村義歩 池田勇也
森厚貴 樗木玲美 河野礼奈

会計監査委員 (教員) 岡田洋一 田中安平 (学生) 黒木大雅 池川絢音

鹿児島国際大学社会福祉学会誌

ゆかり 第18号

発行 2019年3月20日

編集 鹿児島国際大学社会福祉学会

住所 〒891-0197 鹿児島市坂之上8-34-1
Tel 099(261)3211 (代)

印刷・製本 有限会社 広和印刷
Tel 099(222)3522

